心のふるさと
八千代町のむかし話

心のふるさと　八千代町のむかし話

八千代町立保育園童話研究会

八千代町制三十五周年
童話研究二十周年 記念誌

心のふるさと
八千代町のむかし話

八千代町立保育園
童話研究会

序

八千代町長　宮内良一

どの地方や町にも、昔から言い伝えられてきたことわざや、むかし話が沢山あります。

そんなむかし話は、昔の人々の暮らしに密着したほのかな香りが、〝心のふるさと〟の情景を描きだしてくれるものです。

最近メディアの発達と共に、人々は胸の奥深く宿る、ふるさとへの想いを忘れがちな傾向にあります。

そんな時、〝八千代のむかし話〟について研究されてきた八千代町立保育園の童話研究会が、これらを収録し、「心のふるさと　八千代町のむかし話」として刊行されることは、情操教育に大きく好影響を与えるばかりでなく、〝ふるさと八千代〟を、心に深くきざんでくれることでしょう。

本誌の編さんに深く敬意を表して止みません。

はじめのことば

本田宗夫

昭和四十六年に、八千代町の保母さん方が、童話研究に取り組まれてから、既に二十年近い歳月が流れました。

時の流れは実に早いものです。お忙しい保育の合間に、お互に励し合い乍ら、よくぞ続けられたものであると、いつも感心いたしております。

継続は力なりと申しますが、正にその通りで、先生方の童話に対する研究、理論や実演は、ハイレベルであり、立派なものであります。

これは、童話はこどもの心を育てるものであり、魂を揺さぶるようなよい話を、語りきかせることによって、感受性のつよい幼児は、直ちにこれに共感し、感動感激をするのであります。この感動感激なくして教えの実をあげることはできないとさえ言われておるのでありますが、これらが人間形成の基盤となり、やがては豊かな人間性を作りあげるものであるという童話の本質をしっかりと把握され、童話研究を続けられてきたのであります。

三年前のある研究会の席上で、民話が取り上げられました。今や民話は埋れかけている。今掘り起さねば永久に消えてしまうのではないか。私達の手で何とか八千代の民話、昔話を研究してみようじゃないか。ということになり、その実践に移ることになりました。

民話とは、今更申す迄もなく、昔から、その土地の我々の祖先の間に、いつしか生れ育ち、伝えられてきたものであり、その中には、人々の喜びや、悲しみや、怒りや、苦労、希望など、さまざまな思いが溶けこんでおり、いわば祖先の足跡であり、歴史であると言えると思います。

古来、加古川流域に比べると、地理的条件の異った野間川流域に発達した文化は、種々の伝説、昔話等、他地方で見られない、一種異った素朴な、いい物語を残しているようであります。

そこで、第一年目と二年目は、資料集めと、その組立て、再話するといいますが、これの実演と研究にかけることになりました。

この資料集めが大変な仕事で、先生方は、時を惜しまず神社、仏閣等を訪ねては、古文書を拝見したり、僧侶、神官の方よりお話を聞き、又、村を離れて遠くへ移られた方より貴重な話を承り、部落の古老を尋ねては、忘れられかけている話や、唄をテープに収めたり、このままでは、断片的であり、とても語り聞かせられないので、これを都合よく継ぎ合せたり、こどもの興味や関心、想像力を豊かにするために一部創作、改作したり、唄や遊び、ユーモアを取り入れるなど、工夫を重ねて、一つの民話として語りきかせ、更にその実践の上に立って、研究討議をなし、より良いものを作るべく、研究会を重ねるうちに、二年の歳月が瞬く間にすぎ去りました。

この間、やっと二十有余篇の苦心の結晶を生み出すことになりました。

数こそ、稍少い感もありますが、内容の豊富なること、素朴な八千代の人情、風俗等が随所に溢れ、人の心をうつものがあると思います。

第三年目は、この八千代の土の香匂る二十数篇を一冊に纏めたく、一同、校正に校正を重ね、一篇ごとに更に修正、検討を加え、お互に文才の乏しさを痛感しつゝ、三月末に、やっとペンをおくことができました。皆さん本当によく頑張られました。

拙い小冊子でありますが、私共の心のこもったこの民話集が、只に保育園で活用されるだけでなく、学校に於ても、ご家庭や一般の方々にも愛読されまして、ふるさと八千代町のよさを、再認識されますようお願いいたします。

私共、微力であり、至らぬ点も、多々あると思いますが、よろしくご批判、ご指導下さい。

最後に、ご協力、ご鞭撻いただきました関係各位のご好意に対し、深く感謝の意を表します。

（平成三年三月末日）

目　次

1. 雲にしぐれはないかいな……7
2. きつねとあかいのみず……13
3. 龍王の舞……20
4. あまんじゃこ……26
5. 川西の八咫烏さま……31
6. 桑坂のきつね……36
7. おへんろさんと六塚……41
8. いぼ薬師さま……48
9. 雨散々……54
10. 夢の宝物……59
11. 東向き地蔵さま……64
12. 大屋博多……69
13. てんどろ谷の天狗……77

14 三原のお薬師さま……83
15. トントン山道……89
16. コン太と数珠くり……95
17. 浄善さま……101
18. 大杉の神様……106
19. きつねがえり……111
20. 木挽さん……117
21. 遠藤源三郎さんのお墓……123
22. 天船の天狗……127
23. 一夜凍……134
24. ぽっぽこねんじゃ……140

雲にしぐれはないかいな

上三原の里に、村の守り神様、毘沙門さまがお祭りされており、そこの境内に鐘つき堂があります。

むかし、その毘沙門さまより、少し山道を登って行った所に、働き者の長太郎さんと、佐助という心のやさしい息子が住んでいました。

長太郎親子は、毎日、お米や麦や野菜を作って、仲良く暮らしておりました。

「おっとう、毘沙門さまへお参りしてくるからな。」

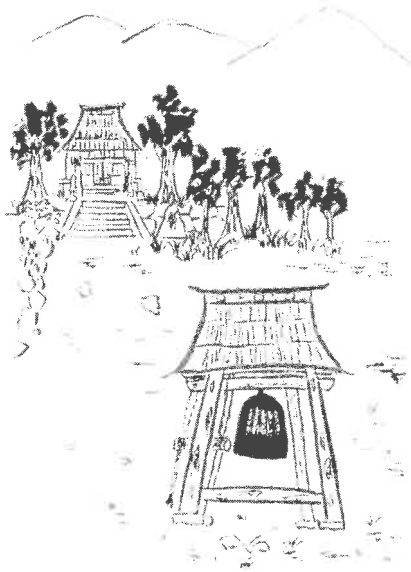
佐助は毎朝、毘沙門さまへお参りしました。

〝ゴーン〜〜〜〜〜〜〟

と、鐘をつき

「今日も一日　元気で暮らせますように。」

と、拝んでおりました。



佐助のつく鐘（ね）の音は、天高く響き渡りました。

その音に聞きほれていたのは、雲の上の雷さまです。

「おお、今日もいい音じゃの。これでぐっすり眠れるわい。」

そう言うと、寝ぼすけの雷さまは、大いびきをかいて眠ってしまいました。

あちこちの木々で、ミーン　ミーン　ミーンと、蝉が鳴いている暑いあつい　夏の日のことです。

「佐助や、今日は田んぼの草取りを手伝うてくれるか。」

「うん、ええで。」

「暑いけど頼むでな。」

ギラギラと太陽が照りつけ、空にはふんわり綿のような雲が浮かんでいます。佐助とお父さんは、麦わら帽子をかぶり、手ぬぐいを腰にひっかけて、田んぼへ出かけました。

土手には、野かんぞうの花が、重そうに首を垂れています。

「おーい、こっちの深いところにでっかい鮒がおるで。」

「わぁ、ほんまにでっかい鮒やなぁ。」

「はようつかまえよう。」

川原から、にぎやかな子どもたちの声が聞こえてきました。

草取りをしていた佐助は、もう魚取りがしたくてたまりません。じっとしていられなくなって、子どもたちの所へ走って行きました。

「おーい、でっかい鮒はどこや。」

「あっ、佐助兄ちゃん、こっちやで。」

「よーし。」

と言って、佐助は川へ飛び込んだかと思うと、両手で大きな鮒をつかまえて来ました。

「さあ、つかまえたで、それ。」

「わぁい、佐助兄ちゃんすごいな。」

「なあ、もっと取ってえな。」

「よし、よう見とくんやで。」

佐助は、深い所をめがけて飛び込み、また大きな鮒をつかまえて来ました。

「さあ、つかまえたぞ。これを持ってはよう帰るんやで。」

「うん、おおきに。」

子どもたちは喜んで帰って行きました。

「ああ、さっぱりした。よし、もうちょっと草取り頑張ろう。」

お日様も沈まれ、あたりが薄暗くなるまで、一生懸命に働きました。

その後、何日も何日も雨が降らない日が続き、川の水も段々少なくなってきました。

お百姓さんにとっては、水は何よりも大切なもの水がなくてはお米や野菜がとれません。

いつものように、長太郎親子が田んぼへ行くと、とうとう田んぼの水もなくなって、あちこちにひび割れが出来ていました。それで側にある井戸の水を汲んで入れることになりました。

「佐助や、井戸の水を汲むからな、水汲み桶を取って来てくれっか。」

「うん。」

佐助は急いで家に帰り、水汲み桶を持って来ました。

「この桶をな、井戸の中へ入れて水を汲むんやで。」

「ふうん、面白そうやな。」

佐助はお父さんと一緒に、ギーバシャン、ギーバシャンと、なんべんもなんべんも、井戸の水を汲んでは、田んぼへ入れました。

次の日もその次の日も、せっせと井戸の水を汲んでは、田んぼへ入れました。

なかなか雨が降りそうにありません。

そんなある日のこと、

「あっ、なんちゅうこっちゃ。井戸の水もないようなってきた。」

「えっ！井戸の水もか、えらいこっちゃな。川の水もないようなっとったで。」

「このまま雨が降らなんだら、今に、わしらの飲み水までなくなってしまう。困ったこっちゃの。」

長太郎親子が家へ帰ると、親戚の源さんが相談に来ていました。それで、長太郎さんは源さんと、庄屋さんの所へ行きました。

そしてあくる日、庄屋さんから、雨乞いをすると言う知らせがあり、村の人全員、子どもも一緒に毘沙門堂に集まりました。

「おうい皆の衆よう聞いてくれ、こない長いこと雨が降らんのでは、雨乞いのお祈りをせないかん。」

「そうや、そうや。」

「それでな、毘沙門さまの吊り鐘を降ろして、カジヤ杉の奥の滝壷まで持って行って、滝のお不動さまにお願いしょう。さあみんな、力を合わせて頑張ろうやないか。」

「そうや、そうや。力をあわせて頑張ろう。」

「きっと、わしらの願いを聞いてくれてやで。」

村人達みんなで大きな吊り鐘を降ろしました。どっしりと重いので、長い棒を渡して、

「さあ、ええか。担ぐんやぞ。」

「そーれ、一、二、三！。」

やっと鐘が持ち上がりました。

「大事な吊り鐘を落とすでないぞ。」

雨降りや　祝言ぞ
雲にしぐれはないかいな

村の人達みんなで歌いながら、長い長い行列を連ねて、よいしょ、よいしょと、歩いて行きました。

山のふもとにある泥田の側を通りかかった時、

「さあ、田んぼの泥をかけるんやぞ。はよう雨が降って洗い流して下さるようにな。」

庄屋さんの合図で、鐘を運ぶ人達に泥をかけ始めました。

「そーれ、いくぞ。」

「えい！。」

〃ブチュ〃

「えい！。」

〃ブチュ〃

「あっ、いてて・・・、泥んこになってしもうた。」

「こりゃたまらんわい。顔も泥んこになってしもう

た。はよう雨を降らして下され。」

「それ、鐘も泥んこにするんやぞ。」

「えい！。」

〃グチュン〃

「えい！。」

〃グチュン〃

運ぶ人も、鐘も、泥んこになってしまいました。

雨降りや　祝言ぞ
雲にしぐれはないかいな

と、人々は、また歌いながら、よいしょよいしょと、山道を登って行きました。

やっとのことで、滝のお不動さんに着きました。鐘を沈めると、お不動さまに向って、みんなでお願いをしました。

「はよう雨を、大雨を降らして下さいますように。」

「どうか、わしら百姓をお助け下さい。」

村の人達は、みんな手を合わせ、一生懸命にお願いをして、鐘は滝に沈めたまま、帰って行きました。

それから、しばらくたったある日のこと、空が急に曇り始め、黒い雲につつまれたかと思うと、

ピカッ

ゴロゴロ　ゴロゴロ

と、雷が鳴り出しました。

「わあい、おっとう雷が鳴り出したで。」

「もっと鳴れ、もっと鳴れ。」

佐助が空に向かって叫ぶと、雷の音は一段と大きく鳴り響きました。

ピカッ

ゴロゴロ　ゴロゴロ　ゴロゴロ

そして、ポツリ、ポツリと、大粒の雨が降り始めたかと思うと、急にざぁーと、ものすごい勢いで降って来ました。

「あっ、雨や雨や。」

「ええ雨や。」
「ありがたや、ありがたや。」
村人達は、大喜びで手を取り合い踊り出しました。
「お不動さんのお陰や。みんなでお礼に行こう。」
「ほんまや、ほんまや。」
からからだった田や畑、山の木や草もみな生き生きとしてきました。
次の日の朝早く、みんな揃ってカジヤ杉の奥の滝壷へ行き、
「お不動さんのお陰です。ありがとうございました。」
「これで、お米や野菜が沢山とれます。ありがとうございました。」
と、何度も　何度もお礼を言いました。

雨降りや　祝言ぞ
　雲にしぐれはないかいな

歌いながら、みんなで鐘をかついで持って帰り、鐘つき堂に納めました。そしてお礼にひとつ庄屋さんが鐘をつきました。

〃ゴーン〜〜〜〜〃

その鐘の音は、三原の里に響き渡りました。

※ 上三原毘沙門堂は、約七百年前の鎌倉時代より、霊験あらたかな神様としておまつりされています。
ご本堂には毘沙門天、十六善神、観世音菩薩がおまつりされており、十六善神は、県の重要文化財に指定されております。
昔は、田の水を大切にされていて、二十日間も日照りが続くと、鐘桜堂の吊り鐘をおろし大勢でかついで、カジヤ杉の奥にある滝壷へ持って行き雨乞いをしていたそうです。
鐘の大きさは、直径八十センチ・高さ一メートル
現在の吊り鐘は、昭和二十三年に新鋳した第三代目です。

ふるさと伝承の抄を参考

きつねとあかいのみず

むかし　むかしのおはなしです。
山と山に囲まれ、曲がりくねった細い道が、ずうっと続いている大和村という小さな村がありました。
村の真ん中あたりには、沢山の柳の木が立ち並んでいて、風が吹くたびに、木洩日がちらちらとゆれていました。
その間をぬけて、はるか上の方まで続く石段を上っていくと、山の中に揚柳寺というお寺がありました。
お寺の側の岩間からは、チョロチョロときれいな水が流れていました。
その寺から一里ばかり離れた所に、村でも人一倍働き者の佐吉さんという人が、おっかさんと二人ですんでいました。

「ほな　おっかあ行ってくるで。」
「ああ、よう気をつけてな。」
佐吉さんは、くわを肩に担ぎお弁当を腰につけて山の下の畑へ出かけて行きました。
佐吉さんはこうして、毎日せっせせっせと畑を耕しました。
今日もお昼になったので、あぜ道に腰をおろし、お弁当を広げました。佐吉さんは、おっかさんが作って下さったおむすびを食べるのが楽しみです。
「おっかあの作ってくれたおむすびはおいしいなあ。」と、言いながら食べていると、後ろの竹藪の方で、ガサゴソガサゴソと音がしました。
立ち上がって見ようとすると、どこかへすっと逃げてしまいます。
「はて、何やろ。犬かそれとも兎かな。」
佐吉さんは独り言を言いながら、おむすびを食べ仕事にとりかかりました。
次の日も佐吉さんがおむすびを食べていると、また

何かやってきました。

ガサゴソ　ガサ
ゴソ・・・・。

「ははーん、また来たぞ。今日は知らんふりしとったろ。」

ガサゴソ　ガサ
ゴソ・・・・。

少しずつこちらへ近づいてきます。そおっと振り返って見ました。

「なあんや、きつねか。このおむすびが欲しんやな。ああ　よしよし。」

心のやさしい佐吉さんは、きつねの方を向いて言いました。

「このおむすびが欲しんやろ。さあ、こっちへおいで。」

きつねは、最初ちょっとびっくりしていましたが、

佐吉さんのやさしそうな顔を見ると安心したのか、のこのこ側へやってきました。

「さあさあ、おいしいおむすびだぞ、一つ食べな。ほっぺたがおちるほどおいしいぞ。」

「おおきに、コーンコン。」

と、お礼を言うと、きつねはおむすびをむしゃむしゃ食べ始めました。

「おいしいなぁ。」

「そうやろ、おいしいやろ。おっかあの作ってくれたおむすびやからな。どれ、わしもいっしょに食べようかな。」

佐吉さんときつねは、仲良く座って食べました。次の日も、きつねはにこにこしながら畑へやってきました。

げんこつ山のたぬきさん
おっぱいのんでねんねして
だっこしておんぶして

ジャンケンポン

「あっ、負けてしもうた。佐吉さん強いな。」

「そうかのう。」

「もう一回しょうなぁ。」

「げんこつ山のたぬきさん・・・。」

「ジャンケンポン。」

「あっ、今度はおらの勝ちや。」

きつねは喜んで、コーンコンと宙返り。

「おまえも強いやないか、そんなに喜んで・・。ワッハハハハ。」

「なあ、明日も遊ぼうな。」

「おお、よしよし。」

それからというもの、すっかり佐吉さんとなかよくなったきつねは、毎日毎日畑へやってきては、仕事を手伝ったり、お昼ごはんを頂戴したりしました。

ある日のこと、佐吉さんのおっかさんが病気になって、高い熱をだして寝込んでしまいました。佐吉さんは、おっかさんの世話で畑へ行くことができませんでした。

そうとも知らないきつねは、今日も喜んで畑へやってきましたが、佐吉さんの姿が見えません。きつねは、

「佐吉さーん、コーン。」

「佐吉さーん、コーン。」

と、あちらこちらと捜しまわりましたが、とうとう佐吉さんの姿は見あたりませんでした。

やがて、ふもとの村では、ぽつりぽつりと明かりがつき始めました。

それでも、いつもの場所に座って、じっと待ちました。

次の日も畑へやってきましたが、佐吉さんは出てきませんでした。
「おかしいなあ。どないしたったんやろ。」
きつねは心配になり、とうとう佐吉さんの家までやってきました。
戸の透き間から、そおっと中をのぞいてみると、年の寄ったおっかさんが苦しそうに寝ておられます。そばで佐吉さんが一生けんめい看病していました。
「あれ、おっかさんが病気やったんか。気の毒になあ。佐吉さんもえらいこっちゃ。はよう、ようなってくれたったらええのになあ。」
きつねは、そういいながら、心配そうに山へかえって行きました。

何日かすると、おっかさんの病気も少しはよくなってきましたが、年寄りのことやから足腰が痛くなったり、目もぼーっとしてはっきり物が見えんようになってきました。

「なんとかしておっかあの目を治したいもんや。どないしたらええやろ。」
「あっ、そうや。この村で何でも一番よう知っとってのおよねばあさんに聞いてみよう。」
早速、佐吉さんは、およねばあさんを尋ねました。
「おばあさん、こんにちわ。」
「やあ、佐吉さんか、何ど用事かいな。」
おばあさんは、仕事の手をとめて、佐吉さんの顔を見ました。
「あのな、うちのおっかあの目が弱ってきて……、なんとか治してやりたいもんじゃが。」
「なんとまあ、えらいこっちゃなあ。」
およねばあさんはしばらく考えこんでいましたがやがて、こんな話をして下さいました。
「そうやな、こんなこと聞いたことあるで。あの揚柳寺のことやけどな、昔　この地に法道仙人という偉いお坊さんが来られてな、山の中で、うとうと昼寝をされていたら、夢の中に観音様が現れたってな。」

「えっ、観音様ってなんや。」
「観音様いうたらな、偉い仏様のことやで。その観音様がな、『山のふもとの沢山の柳の木の中に一本光っとる木がある。その木を切るがよいぞ』と言われたそうな。」
「ふーん、光る木か。」
「そうや、光っとる木や。そこで早速、柳の木の所へ行って見ると、ほんまに木と木の間に一本〝ピカッ〟と光っとる木があった。」
「ほんまにあったんか。」
「そうや、そこでな、その木を切り根本の太いところで揚柳観音を、先の細いところでせんじゅ観音を彫っておまつりされたそうな。そしてな、近くに湧き出る水を観音様にお供えされたんじゃ。その水には、またえらい御利益があってな、目の病気によく効くそうやで。これが柳の観音様のお話や。」
「ほんまでっか、それはええ事を聞かせてもらったぞ。おばあさんおおきに。」
佐吉さんは、お礼を言うと、急いで家へ帰りました。
「おっかあもどったで。」
「どこへ行っとったんや。」
「目によく効くお水の話を聞いてきたんや。それでな、今から揚柳寺へ行くで。おらがおんぶして行ってあげるからな。」
そう言うと、佐吉さんは、おっかさんを無理やり背中におんぶして、揚柳寺へ出かけていきました。
お寺まで行くのには、何十段もの石段を上っていかなくてはなりません。
「ほな　ここから石段やで、上るからな。しっかりつかまっておりや。」
「佐吉、大丈夫か。」
「大丈夫や、力持ちの佐吉や、まかしとき。」
「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」
「佐吉、すまんこっちゃな、重たいやろ。」

「何よってんや、おらのおっかあやないか、遠慮せんとき。」
石段のまわりには、柳の木にまじって山つつじがきれいに咲いています。
「おっかあ、きれいな花が咲いとるで。」
「ほんま、ええにおいがするわ。」
「よいしょ、よいしょ。」
「もう少しやで、中程まで上ったで。しっかりつかまっとりや。」
「よいしょ。」「こらしょ。」
「よいしょ。」「こらしょ。」
「あれ、えらい軽うなったで。おかしいなあ。」

佐吉さんは振り向きました。すると、何とあのきつねが後押しをしているのでした。
「わあ！　おまえやったんか。おまえが押してくれとったんか。」
きつねはにっこりすると、佐吉さんのおしりを押しました。
「よいしょ。」「こらしょ。」
「よいしょ。」「こらしょ。」
「重たいやろ、すまんな。」
「何言うてんや。おらと佐吉さんは友達やんか。こんなこと当り前のこっちゃ。」
「おおきに。」
「よいしょ。」「こらしょ。」
「それ、もうちょっとや、よいしょ。」
「それ、がんばれ、こらしょ。」
やっと長い石段を上がりきって鐘つき堂に着きました。
「おっかあ、鐘つき堂に着いたで。」

「そうか、そうか、重たかったやろ。」
「なあに。今からお参りさせてもらおう。」
佐吉さんは、力いっぱい鐘をつきました。
〝ゴーン〜〜〜〜〜〜〟
鐘の音が、静かな山々に響きわたりました。
それからお寺の前で、
「観音様、どうぞおっかあの目を治してやって下さい。おねがいします。」
と、手を合わせて一生けんめい拝みました。きつねも佐吉さんの真似をして手を合わせました。
そして、岩間から流れ出るきれいな水で、何べんも何べんもおっかあの目をふいてあげました。冷たいお水も飲ませてあげました。
「ああ、おいしい。なんや目が治りそうな気がしてきたわ。おおきに、おおきに。」
おっかさんは、大変喜んで言いました。
あくる日からきつねは、このお水を毎日せっせせっせと、おっかあの所へ持って行ったということです。
やがて、稲の穂も色づく頃、お水のおかげで、おっかさんの目もすっかりよくなりました。
それからも、このお水は目の病気に効くといい伝えられ、大ぜいの人たちが御利益を受けることになりました。
このお水は、〝あかいの水〟といい、今もたえることなくこんこんと湧き出ております。そして、今でもあちらこちらから沢山の人々が、柳の観音さんにお参りに来られています。

※ 天台宗・柳山揚柳寺は、その名の通り、昔、寺の周辺に大きな柳の木が立ち並び、本尊の揚柳観世音菩薩を楊柳の木で刻んだことによる。
そして、あかいの水は、法道仙人が観音様を供養するのに岩間からしみ出る水をくんで、お供えしたと伝えられる名水である。

龍王の舞

みんなのおじいちゃん、おばあちゃんがまだ生まれておられなかった頃の、むかし、むかしのおはなしです。

野間谷が沼谷といわれていた頃、この辺りは、道も山も川も田圃もなくて、沼地が、ずうっとどこまでも続いておりました。

猿田彦命（さるたひこのみこと）という神様は、龍王ともいわれていました。ある日、お供の獅子と一緒に雲の上から下の方を見ておられました。

ちょうど沼谷の上に来られた時、神様が大きな声でいわれました。

「おお、あそこに広い沼地があるぞ。あれを耕したら、ええ田圃になるやろうのう。ひとつ、わしらが田圃を作ってみようやないか。獅子よ、おまえも手伝うてくれるか。」

「はい、神様。ええ田圃になるんやったら、おいらも喜んで手伝いましょう。」

さっそく神様と獅子は、あかあかと燃えている松（たい）明（まつ）を持って雲に乗り、天船（あまふね）という所へ降りて来られました。

天船の土は泥んこで、歩くたびに足が、ずるっ、ずるっと入り、うまく歩くことができません。

「ここは思うたよりじゅるいのう。おっとっとっと、あっ、しまった。」

ドテーン

「あーあ、泥んこになってしもうた。」

神様は、泥の中を転んだり、尻もちをついたりしながら歩きまわり、東の方には川を、西の方には田圃を、真中に道を作ろうと考えられました。

神様が考えられたとおりに獅子が、鼻で土を掘り

起こし、出てきた石を、川になるところまで持って行きました。

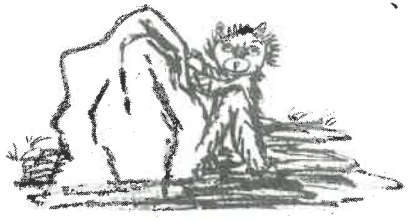
ある日のこと、獅子がいつものように土を掘っていると、大きな石にぶつかりました。

「あっ、痛たたた。ああ痛あ。もうちょっとで鼻が折れてしまうとこやった。ああ痛かった。それにしても大きな石やなあ。でもおいらは力持ちや。動かしてみせるぞ。よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

獅子は、顔をまっ赤にしてがんばりましたが、石は少しも動きません。

「神様、この石は大きすぎて、おいらの力では動かへんから手伝うて下さい。」

「それは困った。では、一緒に動かして　みようかの。」



「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

二人は、力をいっぱい出して石を押しましたが、石は少しも動きませんでした。

神様も獅子も、汗びっしょりでふらふらです。

〝あーあ、やっぱりあかんわ〟

「神様、もうやめて、他の所を探しましょう。」

「いやいや、ここは、山と山に囲まれたええとこじゃ。こんなええとこに田圃ができたら、人間たちが喜ぶぞ。それに、毎日毎日動かせば、きっと石は動くぞ。獅子よ、それまでがんばろうやないか。」

「そんなら、もういっぺんがんばってみましょか。」

それからも二人は、大きな石を動かし続けました。それでも石は少しも動きません。でも、二人は一生懸命がんばりました。

何日かすぎたある日、大きな石はぐらっと動き、ごろん、ごろん、ごろんと転がり始めました。

「わあ、動いた、動いた。」

神様と獅子は手をとりあって喜びました。神様と

獅子の目から、涙がつうっと流れおちました。
「あっ、神様の手、傷だらけで血が出とる。痛そうやなあ。」
「獅子よ、おまえの鼻のまわりも、石ですりむいたんやの。血が出とるぞ。かわいそうに。」
でも、二人とも、ちっとも痛くはありませんでした。毎日しんどかったけれど、今はとってもいい気持ちです。
それからも、神様と獅子は歌を歌いながら、何日も何日もかかって、田圃と道と川を作られました。

りょうおん　りょうおん
りょうおん　りょうおん　りょうおん
泥んこだった所が、少しずつ小さな田圃になっていきました。
やがて、道に草が生え、川にはきれいな水がさらさらと流れて、魚が泳ぐようになりました。
ある日、お米がたくさん取れるような所はないかと探して、男の人たちがやって来ました。

「ここはええとこやなあ。水はきれいし、ここやったら米がようけ取れるぞ。」
「ちょっと土がじゅるいけど、ほんまにええとこや。」
「そんなら、もっとみんなをよんでこうか。」
「うん、そうしょう。仲間を大勢よんできて、みんなで米を作ろうやないか。」
やがて、二人、三人と人びとが集まってきて、村ができました。
村の人達はさっそく、田圃に稲の苗を植えました。初めは青あおと育っていたのに、どうしたことか、どの田圃の稲もだんだん枯れていきました。
「一生懸命せわをしたのに、なんで枯れてしまうねやろ。水もいっぱいあるのにな。」
「水がいっぱいたまりすぎて、根が腐ってしもうて、枯れたんとちがうやろか。こんなじゅるい田圃では稲があかんのや。」
「そんなら何を作ったらええねやろ。」
村の人達が困っている所へ、神様が来られました。

村の人達は、神様の顔を見るなり、
「ひえー　こわいよう、助けてくれー」
と言って、逃げ出しました。
「おうい、わしは優しい神さんじゃ。ええ事を教えてやるから、戻ってこーい。みんな戻ってこーい。」
村の人達はそれを聞くと、そろり、そろりと戻ってきて、そうっと神様の顔を見ました。
真っ赤な顔に大きな目、高く伸びた鼻、大きな口。それは天狗さんの顔でした。でも、にこにこと笑っておられました。村の人達はその顔を見て、神様がすっかり好きになりました。
「稲が枯れてしもたそうやのう。そんなら、ようみぬきをして、この豆を作ってみたらどうや。これは大豆というてな、炊いて食べたら、とってもおいしい豆じゃよ。」
「水ぬきするて、どうするのですか。」
「田圃の中に、小さな溝を作っての、田圃の水が流れるようにするのじゃよ。そして、この大豆を植えたらええのじゃ。」
「大豆？こんな固い豆をどないして植えたらええのですか。」
「土に穴をあけての、そこへ豆を二粒ずつ入れ、その上に泥の土をかぶせたらええのじゃよ。」
村の人達は、神様にもらった大豆を、教えてもらった通りに植えました。
神様はそれを見て安心され、獅子と一緒に雲に乗り帰っていかれました。

こんどは枯れるどころか、ぐんぐん芽を出し、秋には青い豆がいっぱいできました。
「おうい。うちの田圃にこんなにいっぱい豆が取れたぞ。」
「わしとこの田圃にもいっぱいや。うれしいこっちゃ、ありがたいことじゃ。」
「この田圃で初めて取れた豆や、神さまに一番初めに食べてもらおうやないか。」

「そうやな、神様にお供えして、みんなでお礼を言おう。」
「神さんの面も作ったらどないやろ。」
「そんなら、どんな面を作ろ。」
「神さんと天狗さんと同じやから、天狗さんの面を作ったらどないやろ。」
「それがええなあ。」
「その天狗の面をかぶってお祭りをしたらええな。」

赤とんぼがいっぱいとんでいる、秋晴れのある日、村のはずれにある鎮守様の前に、白い大きなのぼりが立てられ、お祭りが始まりました。

ドーン　ドーン　ドーン　ドーン

力強い太鼓の音が、山やまに響きわたりました。村中のおとなやこどもが、塩で茹でた獅子豆を持って集まって来ました。

「神様、おかげで大豆がようけ取れてありがとうございました。どうぞ、食べてください。」
「神様、豆がたくさん取れておおきに。来年もいっぱい取れますようにお願いします。」

お神酒がみんなにまわされて、男の人も女の人も、獅子豆をいただきながら、お神酒を飲みました。

みんながいい気分になったころ、若くて元気な政やんが天狗の面をかぶり、長い矛(ほこ)を持って、みんなの前に走りでました。

「おっかあ、こわいわぁ。」

見ていたお花ちゃんは、あわててお母さんの後ろにかくれました。

「あれはな、田圃を作ってくれたった神様のお面をかぶった村の人やで。」
「ふーん、天狗さんが神さんやったんか。こわい顔しとったったんやなあ。」
「顔はこわいけど、心はやさ

しい神さんやったんやで。」

天狗の面をかぶった政やんは、長い矛を振りまわしながら、お宮さんの庭を右へ、左へと走りまわりました。

りょうおん　りょうおん
りょうおん　りょうおん　りょうおん

夕日を浴びた境内で、政やんの踊りまわる龍王の舞は、いつまでも、いつまでも続いておりました。

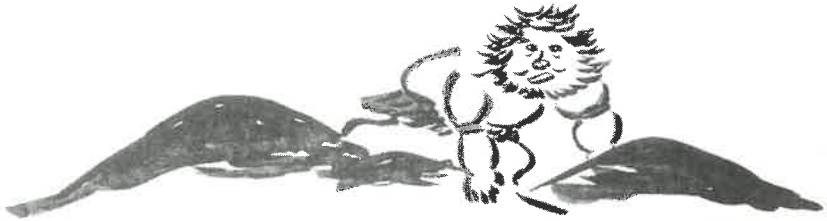
※ 龍王即ち猿田彦命が天舟に天降り給い、排水路、田畑の区画測量をされたのでこの儀式舞を行い、これを龍王の舞という。この儀式舞は、太古、この地創業にまつわる伝説として、猿田彦命の道案内に引き続き獅子が来て、荒地を掘り返し田畑を作ったことを擬したものといわれている。

天船(坂本、中村、横屋、下村)の秋祭りに、行なわれている伝統行事である。

— 八千代町史より —

あまんじゃこ

「これ好きや。」
と、言ったら、
「そんなん嫌いや。」
「これ、おいしいな。」
と、言うと、
「いいや、あじない。」
と、いうように、人の
反対ばかりいう人を、
『あまんじゃこ』と
いっています。
この『あまんじゃこ』
の先祖が大むかし、
播磨の国にもおりました。



あまんじゃこは、立つと雲までとどくほどの大男で、あちこちの谷川をせき止め、水が流れないようにしたり、いたずらをして喜んでいました。

ある日のこと、笠形山のふもとに、元気者の正太ちゃん、じゅんちゃん、佐代ちゃん、里ちゃん達が、お宮さんで遊んでいました。

たんす長持ち　どのこがほしい
　あのこがほしい
あのこじゃわからん　名をよんでおくれ
　さよちゃんがほしい
なあにになって
　うさぎになって
かってうれしい花いちもんめ
　まけてくやしい花いちもんめ

あまんじゃこは高い山の上から、子ども達の遊び

や話を聞いて、
〝よーし、いたずらをしてびっくりさせたろか〟
と、考えながら見ていました。

お日様が西の山へ入り、だんだんと夕方近くなりました。
「なあ、みんな、もう帰ろう。おかあちゃんが心配してやで。」
「帰ろう帰ろう。また、明日も遊ぼうな。」
きれいな夕焼け空のなかに、いつも見ている笠形山が、いっそうきれいに見えました。
「わあ、笠形山がきれいやなぁ。夕焼けで赤うそまっとる。」
「ほんまや、きれいわぁ。」
「中町にも笠形山とよう似た妙見山という山があるんやで。お椀をかぶせたような山で、ぽっこりしとるんや。」
「へえーっ、その二つの山に虹の橋がかかったらきれいやろなぁ。」
「ほんまや、七色の虹の橋やったらきれいやろなぁ。」
「なあ、正太ちゃん、あの笠形山に、あまんじゃこがおるいうのん聞いたことあるか。」
と、里ちゃんが言いました。
「うん、聞いたで。すごく大きいて、いたずらばっかりするんやろ。」
「そいで、力も強いんやろ。」
「ほな、あまんじゃこやったら、笠形山から妙見山まで、橋をかけられるかも知れへんな。大きいてすごい力持ちなんやろ。」
「無理や、無理や、なんぼ大きいて力持ちでもあかんあかん。」
「そうや、山から山へ橋なんかかけられへんにきまっとる。それに、虹の橋のほうがきれいやわ。」
「そうやなぁ。」
それを聞いたあまんじゃこは、
「何やて、わしにでけへんことがあるやて。そんな

ことがあるもんか。」

そこで、反対といたずらが大好きなあまんじゃこは、絶対できないと言われて、

「よーし、見とれ！　一晩のうちに、笠形山から妙見山まで、立派な橋をかけてびっくりさせたるぞ。」

あまんじゃこは、暗くなるのを待って、早速橋づくりにとりかかりました。

「さてと、橋の土台からつくろう。」

力持ちですから、付近にある大きな石をつかんでは、片方の手で笠形山、もう片方の手で妙見山へとどんどん積んでいきました。

「よいしょ、もう一つ。」

「よいしょ、それ。」

「よいしょ、それもう一つ。」

と、大きな石をどんどん積んでいきました。

「土台がやっと出来たぞ。こんどは、笠形山から妙見山まで橋をかければいいんじゃ。なにで橋をつくったら良いものか。困ったぞ。」

あまんじゃこは、橋をかけるようになって困ってしまいました。

「そうだ。長い木を探そう。」

と、あたりを見回わしました。あっちの山、こっちの山を探し歩きました。

でも、橋になるような長い木は、見つかりませんでした。

「ないぞ。どうしよう。困ったな。」

あまんじゃこが困っているのを、木の上から見ていたふくろうが、

「ホー、ホー、何をそんなに困っているんだい。」

と、言いました。

「困ってなんかいるもんか。」

と、いい返して、あまんじゃこは、また、探しはじめました。

でも、やっぱりありません。

「ないぞ。どこへ行けば、橋になるような長い木があるんだろう。」

すると、また、ふくろうがやってきて、

「ホー、ホー、ずうーっと向こうのとんがり山へ行ってみな。長い木があるかもしれないよ。」

と、言いました。

「おまえの言うところへなんか行くもんか。わしが探してみせるわい。」

と、言って、ふくろうが教えてくれた方とは、反対の方へ行きました。

あまんじゃこは、ふくろうの言うことを聞こうともせず、山の中を探しまわりましたが、橋になるような木は、どこにも見つかりませんでした。

「ないぞ、ないぞ。どこにもない！」

手当たりしだいに、木を踏み倒し、あっちの山こっちの山を、うろうろしているうちに、どんどん時が過ぎていきました。

「ああ、どうしたら良いものか。」

と、あまんじゃこは、考えこんでしまいました。

やがて、あたりが段々と明るくなり、一番どりの鳴き声が聞こえてきました。

コケコッコー

「しまった！　もう朝だ。」

あまんじゃこは、あわてて姿を隠してしまいました。

あまんじゃこは、人の言うことを何でも反対したために、笠形山と妙見山に橋をかけることができなかったけれど、あまんじゃこが積んだといわれる石垣が岩になって、今も、二つの山に残っているということです。

※ いたずらが好きなあまんじゃこが、笠形山から妙見山へ橋をかけようとしたが、もう少しの所で朝になって失敗、また、橋をかけているあまのじゃくに、

それはいいことだというと、ピタリと橋づくりをやめてしまったともいわれている。

「ふるさとみはらの生活誌」「播磨風土記」より

川西の八咫烏（やたがらす）さま

みんなのおばあちゃんが、まだ子どもの頃のおはなしです。

中野間の川西というところに、澄んだ水がさらさらと流れている谷川がありました。

その川の中には、四角い石や、丸い石がごろごろころがっており、村の人たちは、石を渡って向こうの山へ行っておりました。

庄太のおじいちゃんも毎日この石を渡って、隣の熊じいさんと一緒に山へ、まきを切りに行っておられました。

この谷川の向こうにも大きな岩があり、子どもたちの遊び場でもありました。

「けんちゃん、今日は、じいちゃんとこへ行って木んますべりしょうか。」

「千代ちゃんらもよしたるさかいに来いよ。」

「ええわ、私らここでおじゃみするから。なぁ、おはるちゃん。」

「うん、この石の上でしょうな。」

「ほな、おれら山へ行ってくらぁ。」

庄太たちは、とんとんと石を渡って山へかけ登って行きました。

千代たちは、川向こうの大きな平べったい岩の上にぺたりと座って、おじゃみ遊びを始めました。

お一つお山のおいつばき、おみなさんでおーさーら
お手しゃみ　お手しゃみ　落して　おーさーら
おつかみおつかみ　おーさーら
おちりんこおちりんこ　おーさーら
おしじゃりじゃり　じゃらりことん
仲良しこよしで　おーさーら
しおりとからりと　おーさーら

岩の上で遊ぶ千代たちの背に、落葉がひらひら散ってきました。

やがて庄太やおじいちゃんたちが、杉葉の束を背おって、山から降りて来ました。

「秋のつるべ落としちゅうて、はよ日が暮れるぞう。千代ちゃんらも、もう、いのかえのう。」

本当にさっきまで日があたっていたのに、いつの間にか薄暗くなっていました。どの家の煙突からも白い煙がもくもく上がっていました。

「ばあさん帰ったぞ。」

「ばあちゃんただいま、はらぺこや。」

「おかえんなはれ、疲れなはったやろ。庄太もおかえり。」

おじいちゃんはご先祖様のところへ行き〝チーン〟と、一つかねを打って、

「今日もおかげさんで、そくさいで働かせてもらいました。」

と、仏様を拝まれるのでした。

庄太は、こんなおじいちゃんが大好きです。今日も、一緒にお風呂に入って、おじいちゃんの背中をながしてあげました。ほかほかといい気持ちです。窓をあけると、まんまるお月様がにこにこと、おじいちゃんと庄太を見ておられました。

それから、何日かたったある夜のことです。

「痛い痛い、あぁ痛い。」

よく寝ていた庄太は、おばあちゃんの声で目が覚めました。

おばあちゃんが、ほっぺを押さえて本当に痛そうです。

おじいちゃんが、手ぬぐいをぬらしては、おばあちゃんのほっぺにあてておられます。

「おばあちゃん、どないしたったんや。」

庄太は、おろおろしながら聞きました。

「どうもせえへん、急に歯が痛うなって、どうにもならんねや。」

「そない、痛いんか。どないしたらええやろ。」

「こんな夜中にどうすることも出来んわい。」

おじいちゃんは、御先祖様の前へ行って、

「摩訶般若波羅密多心経……どうか、ばあさんの歯を治してやって下され。」

と、一生懸命お願いしました。庄太もいっしょに拝みました。

すると、どこからともなく、

『わしは、前の谷川にはまっとる石じゃ、いつも村のもんに踏まれて痛い痛いめにおおとる。どうかわしを起こしてくれ。』

と、聞こえてきました。

「庄太や、今何か聞こえんかったか。」

「いや、おらには何(なん)も。」

「そうか、わしの空耳かのう。」

その時、また、

『やたがらすというて祭ってくれ。』

と、聞こえてきたのです。おじいちゃんは思わず、

「わかりました。あしたの朝、さっそく起こして、祭らせてもらいます。」

と、答えました。

すると不思議なことに、あんなに痛かったおばあちゃんの歯がうそのようにすうっと治ってしまいました。

あくる日の朝おじいちゃんは、隣の熊やんや、他の人たちにも夕べの話をして、谷川の石を起こしてもらうことにしました。

「へぇ、不思議なこともあるもんやのう。」

「いったいどの石なんじゃろ。」

「そりゃ、いっつもよう渡っとるこの長い石やろ。」

「せやけど、この石を起こしたら山に行くのに困るのう。」

「洗たくするのも困るわなぁ。」

「そんなこと言うても起こさんわけにいかんやろ。」

村の人々は、口々に言いながらみんなで起こすことになりました。

「そーれ、一、二の三。」

長い四角い石が起きました。

「ありゃ、この石は、墓石みたいやのう。」

「字がほってあるようじゃ。」

「うつぶせになっとったんでわからんかったんやのう。」

「何でこんなとこに落ちなさったんじゃろ。」

「そりゃ城山の近くやもん、昔の偉い侍さんの墓もこの上にあったんやろな。」

「それがいつの間にやらくずれてきたんやな。」

「それにしても、墓石を踏んで川を渡ったり、洗濯したりしとったとはのう。」

「知らんこととはいえ、悪いことしとったなぁ。」

「ほんまにすまんことしとりました。」

村のみんなは、謝りました。

そして、川向こうに丁寧に、お祭りすることにな

りました。

「じいちゃん、山に行くのに困るなぁ。」

「そうじゃのう、木で橋を作ろうかいのう。」

「うんそれがええなぁ。」

それからは、おじいちゃんや庄太たちは山へ行く時はいつも、

「やたがらすさま、今日も元気で山仕事が出来ますように。」

また帰る時は、

「やたがらすさま、今日も一日ありがとうございました。」

と、手を合わせて通るのでした。

村の人々も歯の痛い時だけでなく、困った時も助けて下さる『ありがたいやたがらすさま』と言ってお参りされるようになりました。

今もこれは、続けられております。

※ 月並み祭に、祭っておられる人たちから聞いた、不思議な御利益のある石塔のはなしです。

野間城のあった近くのこの山すそには、家来の墓所があったと言われ、その墓石がくずれていたらしく、村人は石塔とは知らずに谷川を越す踏台、また、洗濯板代わりに使っていました。

霊感によって現在の位置に祭られたもので、お祈りすれば(首から上)何か一つは、不思議に叶えて下さるとのことです。

とりわけ、歯痛には、御利益があると言われています。

桑坂のきつね

ずっと　ずっと　昔のおはなしです。

加西郡は大和村の三原の里から、多可郡は野間谷村の天船の里へ続く、狭くて急な長い坂道がありました。

この坂を桑坂といって、昼間でも薄暗く、大きな木がたくさん茂っていました。その坂のてっぺんに、野ぎつねがたくさん住んでいて、暗くなると、村の人達にいたずらをしたり、びっくりさせたりしていたそうです。

すっかり秋も深まり、小春日和の続いた、ある日のことです。

桑坂のふもとに住んでいる六兵衛さんが、山の向こうの喜兵衛さんの家へ、お祭りによばれて行くことになりました。

そこで、六兵衛さんは、孫の三吉を連れて行くことにしました。

次の朝早く、二人は出かける仕度をしました。

「おばあさんや、行ってくるからのう。」

「おじいさん、きつねにだまされんようにな。暗うならんうちに帰んなはれよ。」

おばあさんは、心配そうに言いました。

おじいさんと三吉は、朝露のあぜ道を、峠へと向いました。道の両側には、露にぬれたすすきの穂や、野いばらが、からみ合っています。そんな道を、ようやく通り抜けて、坂の下までくると、おじいさんは、ひと休みをしました。

その時

コーン　コーン

「おじいちゃん　早よう坂越えような。」

「なんでじゃ。」

「せやて、きつねの鳴き声がしょるし、出てくるかもしれへんで。」

「こんなあかるいうちから、きつねなんぞ出てこんわい。わっはっはっはっ。」

これを聞いて、三吉も、ちょっとやれやれと思いました。

二人は、薄暗い坂道を、やっと越えることができ、喜兵衛さんの家につきました。

喜兵衛さんは、たいそう喜んで、二人にたくさんご馳走をしてくださいました。

おじいさんは、お酒をいっぱいよばれて、とってもいい気分です。三吉も、お腹がポンポンになりました。

「おじいちゃん、ちょっと暗うなってきたで、もう帰ろうな。」

「せやのう、ほなぼちぼち帰ろうか。」

「なあ六兵衛さんや、もうじきに日が暮れてしまうさかいに、泊まったらどうじゃ。」

「おおきに、おおきに。まだ大丈夫じゃ。」

ご馳走を重箱に詰めてもらって、帰る仕度をしました。

「いっぱいよばれて、すまなんだなあ。」

そう言って、風呂敷包みを、ドッコイショと肩にかけて、三吉と一緒に帰って行きました。

坂に近づくにつれ、もう冬の日も、とっぷりと暮れかけてきました。

その頃、峠では、お腹をすかせた子ぎつねが、〝何か食べるものはないかなあ〟と、捜していました。

「お腹がすいたなあ。

コーン　コーン。

何かいい匂いがしてきたぞ。」

子ぎつねは、坂を登ってくる二人に気がつくと、ちょっと驚かしてやろうと考えました。

「そうだ!!きれいな娘さんに化けよう。」
そう言うと、子ぎつねは、葉っぱを一枚拾って、頭の上にのせると、
「きれいな　きれいな娘さんになーあれ。ドロロン　ドロロン　ドロロンパッ!!。」
くるくるっと宙返りをしたかと思うと、それはそれは美しい娘さんになりました。
「よし、これでいいや。うまく化けられたぞ。」
娘さんは、坂を少し登った所にある夫婦岩で、二人を待つことにしました。
すると、二人が登ってくるのが見えました。
「あっ　来た来た。あのおじいちゃん、足がふらふらや。えろう酔うとってみたいやなあ、しめしめ。」
娘さんは、二人の前にひょいと出ていきました。
「ちょっと　ちょっと　おじいさん。」
「おや、おまえさんいつの間に……。」
「おじいさん、その荷物重そうですね。私が持ってあげましょうか。」
「せやけど　気の毒じゃ。」
「なあ　おじいちゃん、重たいさかいに持ってもらいんか。」
「そうやのう、ほな助けてもらおうか。すまんのう。」
娘さんは、心の中で、〝うまくいったぞ〟と、思いながら、荷物を受け取りました。
「おじいさん、こっちへ行くと近道ですよ。ついてきて下さい。」
「おお　近道があったんかいのう。そら助かるわい。」
「よかったなあ、おじいちゃん。」
娘さんは、二人がついてくるので、安心して先を歩いていると、
「おねえちゃん、峠はまだまだか。」
「ほんまやのう。もうだいぶん歩いたようやが……。」
「もうちょっとですよ。」
「そうかい。それにしても、えらい急な道じゃのう。ここらで一服しょうかのう。三吉も疲れたやろ。」

「うん、なんや眠とうなってきた。」
二人は、歩き疲れたのか、横になるなり、すぐに眠ってしまいました。ゆすっても起きそうにありません。
「もう大丈夫や。うまくいったぞ。えい!!。」
また、くるっと宙返りをすると、もとの子ぎつねに戻りました。子ぎつねは、うれしそうに風呂敷包みをかかえて、山の奥へ消えていきました。
それからどのくらいたったでしょうか。
おじいさんは、すっかり酔いもさめ、寒くなって目がさめました。あたりは、すすきの原っぱです。
「おい三吉や、風邪をひくぞ。」
おじいさんは、三吉を起こしました。
「おじいちゃん、ここはどこや。」
「山ん中じゃ。どうやらきつねにだまされたようじゃ。」
「えっ　きつね。あのおねえちゃんがか。」
「そうじゃ。ほれ　ご馳走がのうなってしもとるぞ。」
「ほんまや。」
「早よう帰らな家の者が心配しょるぞ。」
「うん。」
その時、坂の下の方から、
「おーい　六兵衛さんやー。」
「三吉やー。」
と、二人を呼ぶ声が聞えてきました。あまり帰りが遅いので、家の人が、村の人と一緒に捜しにきたのです。
「おっ　六兵衛さん、無事やったか。」
「べっちょない　べっちょない。みんなに心配かけてすまなんだのう。」
「いやいや、怪我ものうて、ほんまによかったな。」
「なあ六兵衛さんや、ここらへんには、いたずらをするきつねが出るそうやで。あんたは、きっと、きつねにだまされとったんやで。」
「そうや、わしもお酒をようけよばれて、酔うとっ

たさかいに、うっかりしたことやった。みんなに心配かけてすまなんだなあ。」

その後も、幾度となくきつねに化かされる人が出てきました。それで、困り果てた村の人達は、お稲荷さんをお祭りして、きつねの大好きな油あげや、小豆めしを供えるようになりました。

それからというもの、きつねはいたずらをしなくなりました。

また、このお稲荷さんは、願いごともかなえて下さるということです。

※ 昔、上三原部落より、横屋部落に通ずる道は、狭い山道で昼でも薄暗いほど木が繁っており、桑坂峠という難所があり野狐がたくさん住んでおりました。道も悪く、坂が険しく、少し横屋部落で遅くなったりすると途中で日が暮れてしまいます。

ある人は、行けども行けども上三原に着かず、朝まで野狐に悩されたり、ある人は道を間違えたりとか、数多くの人が野狐に悩まされたという話が語り伝えられています。

―ふるさとみはらの生活誌より―

おへんろさんと六塚

山と山に囲まれた草深い野原の中に、下見原村という所がありました。

その村の真ん中を、細い道がずーっと続いておりました。道の両側には、真っ赤な彼岸花が咲いて、まるで絨毯を敷きつめたようでした。

「お静ちゃーん、あそぼー。」

彼岸花の小径を、おまつちゃんが走って来るのが見えました。

「お静ちゃん、その手に持っとっての何や。」

「これか、これはおじゃみや。おっかあにこしらえてもろたんやで。」

「きれいやなぁ。ちょっと借して。わぁええな。そうや、このおじゃみであそぼ。お静ちゃん、先にして見せて。」

「ええで、一緒に歌うとうてな。」

一番始めは一の宮　二で日光東照宮

三で讃岐の金毘羅さん　四で信濃の善光寺
五つ出雲の大社　六つ村々鎮守さん
七つ奈良の春日さん　八つ大和の法隆寺
九つ神戸の楠公さん　十で所の氏神さん

「お静ちゃん上手やわ。今度はうちの番やで。一緒にうとうてな。」

一番始めは一の宮　二で日光東照宮
三で讃岐の金毘羅さん　四で……

「ああ落としてしもた。もう一回してええか。」
丁度その時です。
チリン　チリン　チリン
向こうの方から、白い着物を着た人が、やって来るのが見えました。
「お静ちゃん、誰かきよってやわ。」
「ほんまや、誰やろ。恐いから早う帰ろう。」

「うん、帰ろ、帰ろ。」
お静とおまつは、帰って行きました。
チリン　チリン　チリン
その鈴の音は、おまつたちを追いかけるように響いてきます。
おまつは、家に駆け込むなり、
「おっかあ、白い着物きた人がきよってやで。」
「白い着物きた人がか、どこからきたったんやろな。」
「あのな、鈴みたいなもん鳴らして、大きな笠のようなもんをかぶっとたったで。」
「そうか、顔は見えたんか。」
「いいや、顔はわからへんかったけど、首から袋下げとたったわ。」
「ああ、それやったらおへんろさんやろ。」
「おへんろさん、おへんろさんて何しての人や。」
その時庭先で、
「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛……」
と、拝む声が聞こえてきました。そっと戸口を覗いたおまつは、

「おっかあ、さっきの人やで。」
「これこれ、静かに、静かにしい。」
その間にも戸口では、
「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛……」
と、拝む声が続いておりましたが、誰もいないと思われたのか、足音は遠ざかって行きました。
「おっかあ、何で黙とたったんや。」
「そうやな、悪かったなあ。お芋でもあげたらよかったんやけど、うちも貧乏やしな。」
「おっかあ、おへんろさん言うたら、何かあげなあかんのか。」
「あげなあかん言うこともないけど、せっかく拝んでくれたったのにな。」
「そんなら、おまつのこの焼き芋半分あげたらよかったわ。」

その時分、おまつの家だけではなく、村の人達の生活は、大変に貧しくて、誰もが、その日、その日を食べていくのがやっとのことでした。
その頃、おへんろさんは、お静の家の戸口で、
「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛……」
と、拝んでおられました。
「おっかあ、あの人さっきおまつちゃんと見た人や、何しに来とってのや。」
「ああ、あの人はおへんろさん言うてな、遠い所から来とってのやで。やさしいええお坊さんになれるように、雨が降っても、風が吹いても、たく鉢言うてな、一軒一軒、拝みながらまわってのや。」
「ふぅん、えらいこっちゃな。」
「隣の村には、お寺がいっぱいあるのや。そこには柳山揚柳寺いうて、村の人達は、観音さんといよっての大きなお寺があってな、そこへ仏さんのことを、勉強しにきよってのやで。」

「そんなら、なんで静の家にきとってのや。」
「それもな、おへんろさんの修業のうちや。静の家が幸せになるように言うて、拝んでくれよってのやで。お静、このお米ちょっとだけやけど、あのおへんろさんにあげてきて。」
お静は、おっかあからお米を受け取ると、戸口まで出て行き、おへんろさんの袋の中に、そっと入れてあげました。側からおっかあが、
「御苦労さまでございます。」
と、頭を下げました。
お静がそっと見上げると、大きなすげ笠の下に、やさしそうな女の人の顔が見えました。
おへんろさんは、
「南無大師遍照金剛。」
と、拝まれると、お礼をして、村の道をとぼとぼと歩いて行かれました。
夜になって、お静のおっとうの岩右ェ門さんが、山から帰ってこられました。

「おっとう、今日おへんろさんが来たったんやで。きれいな女の人やったわ。」
「そうか、観音さんへ修業に行きよってのやろ。」
「ほんまに、女の人がえらいこっちゃなぁ。」
次の朝、空はよく晴れて、土手のすすきが波のように揺れています。お静の方を向いて、おいでおいでをしているようです。お静は、夢中になって走って行きました。
すると土手のすすきの中に、何か白い物が見えます。恐る恐る近寄って見ると、それは、昨日のおへんろさんのようでした。
「おっとうー、おっかあー、おっとうー。」
お静は、家の方に走って行きました。
「どないしたんや、大きな声だして。」
「あの、あのな昨日の白い着物きた女の人……。」
「ああ、あのおへんろさんのことか。」
「うん、その人や。あの向こうの土手の所で倒れと

ってのみたいやで。」
「えっ、あんなとこでか。どないしたったんやろ。」
岩右ェ門親子は、走って行きました。
「おへんろさん、おへんろさん。」
岩右ェ門さんは、やさしく声をかけました。
「昨日の晩はちょっと寒かったでな。どっこも泊めてくれてのとこがなかったんやろかのう。」
「あっ、気がついたったみたいやで。」
「おっかあ、わしの背中に乗せたげてくれっか。」
岩右ェ門親子は、おへんろさんを家に連れて帰り寝かせてあげました。
「かわいそうに、だいぶん疲れとってのようや。おっかあ、なんぞぬくい物でも作って、食べさせてあげてくれ。」
「そうやな、じきに作るわな。」
しばらくたって、お静の家で世話になっていることに気がつかれたおへんろさんは、
「すみません、色々とご迷惑をかけますのし。」

「いいや、家にはなんにもないけど、元気になってのまで、ゆっくり休んどくれよ。」
「おばちゃん、いっぱい泊まってな。」
お静も、にこにこしながら言いました。
おっかあは、あたたかいおかゆを作ってあげました。岩右ェ門親子の親切に安心されたのか、その人は、いつの間にか眠ってしまわれました。
そして二日目の朝
「すっかりお世話になりました。ありがとうございました。私は、浄閑(じょうかん)と申します。」
「おばちゃん、どこからきたったんや。」
「おばちゃんは、信州の善光寺いうて、それはそれは遠いお寺から来たのし。」
「ああ、それやったら、おじゃみをする時にうたう信濃の善光寺みたいやなあ。おばちゃん、静の家にいっぱいおってな。」
「そうやのし、悪いけどちょっとの間休ませてな。」
お静はうれしくなりました。やさしそうなおばち

ゃんと、一緒に居られると思うと胸がドキドキしました。

岩右ェ門さん親子は、浄閑さんが早く元気になられるようにと、一生けん命看病しました。

やがて梨谷(なしたに)の方から、木々を鳴らして冷たい風が吹き、小雪のぱらつくころになりました。くる日も、くる日も、凍てつくような寒さの中で、浄閑さんは床につかれたまま、だんだん弱っていかれるようでした。

お静は友達のおまつちゃんと、浄閑さんの枕元で遠い信州の話しを聞くのが好きでした。

「おばちゃん、信州いうてどんなとこ、ここらみたいに寒いんか。」

「そうやのし、高い高い山があってな、夏でも雪が残っているところもあるよし。」

「ふうん、夏でも雪があるのか。」

側からおっかあが、

「お静たち、ええかげんにしときよ。浄閑さんは疲れとってのやで。」

「ええのです。この子らと話しをするのは楽しいのです。」

浄閑さんは、いつもにこにこやさしい笑顔で話して下さいました。

村のあちこちに、桃の花が咲く頃でした。野には菜の花が咲き、風がやさしく菜の花を撫でていきます。

その朝、浄閑さんは、ひっそっり亡くなられました。

見知らぬ土地で亡くなられた浄閑さんを不憫に思って、岩右ェ門さんは、お墓を作ってあげました。お静とお真都は、菜の花を取ってきて、お墓に供えてあげました。

その後、誰がいつから言うともなしに、この辺りを、六塚と呼ぶようになりました。

※ 柳山寺の原という所の山裾に

理牲禅尼
信州善光寺　浄閑
生国　紀州和歌山
世八人　下見原村　岩右ェ門
享和二　いぬ　三月

と刻印された石碑が残っております。荘園として知られていたこの土地には、大小様々なお寺が散在し参拝者が絶えなかったということです。その中にはこの辺りで行き倒れになる人も少なくありませんでした。そう云う人達全てを埋葬してある場所を、六塚と呼んでいます。

いぼ薬師さま

むかしむかしのことです。
中野間のよそべ谷という山に、たぬきのぽん太とおかあさんだぬきが住んでいました。
明け方から降り出した雪が、山や畑をすっぽりと包み、あたり一面を真っ白くおおっています。
おかあさんだぬきは、足の裏にいぼがいっぱいできて、痛くて痛くて歩くことができませんでした。
「ぽん太ごめんな。おまえになんにもしてやられへんで……。こんな時に、清水薬師さんのすべぼうきがあったらええねんけど……。」
「えっ、清水薬師さんのすべぼうきいうて何や？」
「この山をずうっと下りて行ったとこに、清水薬師さんという仏様がまつってあってな、稲の穂でこさえたすべぼうきがお供えしてあるそうや。それでいぼをはきなでたら、きれいにいぼがとれてしまうということや。」
「おっかあ、なんで知っとんの。」
「いつか、人間が、話していたのを聞いたことがあるんや。」
「へーえ。おっかあの足のいぼもとれるやろか？」
「とれると思うけどな……。」
「それやったら、おらがすべぼうきを借りてきたげるわ。」
「そんなことできへん。清水薬師さんは、人間が通る道のじきそばやで、人間に見つかったら、捕まえられてしまう。それに、ようけ雪が降っとるし、危ない危ない。」
「らっきゃ　らっきゃ。じきに戻ってくるわ。」
そう言うとぽん太は、冷たい雪の中へ、飛び出して行きました。
「ぽんたー　行ったらあかん。」

おかあさんだぬきが、大声でぽん太を呼び止めましたが、ぽん太は振りむきもせず駆けて行ってしまいました。
大きな松の木の下を通り抜け、ザクザクと雪を踏みながら山を下りて行きました。
ザクザク　ザクザク
ぽん太の足は、むらさき色に腫れ上がり、じんじんしてきました。それでもぽん太は、冷たい雪の中を駆けて行きました。
ザクザク　ザクザク
「おっかあ、待っとってな。おらがすべぼうき持って帰ったげるからな。」
ザクザク　ザクザク
もう少しで、清水薬師さまに着くという時です。
「うわぁー。」
急にぽん太のからだが、ふわっと浮きあがったかと思うと、ドッシーンとしりもちをつき、山道をズルズル　ズルズルすべり落ちていきました。
「わぁー、誰か止めてー　こわいよー。」
ドスーン
ぽん太は、おっこちたひょうしに、気を失うてしまいました。
長い間たって気がつくと、そばに、おじいさんが立っていました。ぽん太は、びっくりしてぶるぶる震えだしました。
すると、おじいさんは、
「これこれ、そんなに恐がらんでもええ。おまえが気を失うとったから助けてやったんじゃよ。」
と言って、ぽん太の頭を撫でてくれました。
ぽん太は、「おや？」と思いました。おかあさんから聞いていた人間とは大違いです。
「ところでおまえ、こんな雪の中を、なんでひとりぼっちで山を下りてきたんじゃ。」
「うちのおっかあの足にいぼがいっぱいできて歩かれへんので、清水薬師さんのすべぼうきを借りに

来たんや。」
それを聞いたおじいさんは、にこにこしながら言いました。
「おお、そうかい　そうかい。あのお薬師さんやったら、おっかさんのいぼもじっきに治してくれてや。こんな冷たい足して、かわいそうにのー。」
おじいさんは、ぽん太をおんぶして清水薬師さまで連れて行き、そこに流れているきれいなお水を飲ませて下さいました。お水を飲んだぽん太は、すっかり元気をとり戻しました。
「これがすべぼうきじゃ。さあ、おっかさんが心配しとるやろ、これ持って早うお帰り。」
「おじいちゃん、おおきに。」
「おっかさんを大事にするんじゃぞ。」
「うん。おじいちゃん、さいなら。」
ぽん太は、すべぼうきをかかえて、雪の中をすべるようにしてとんでかえりました。

「おっかあ、帰ったで。」
「ああ、ぽん太。よかったよかった。よう無事に帰って来たな。あんまり遅いので心配しとったんやで。」
おかあさんだぬきは、泣いて喜びました。
「おら、気を失うとってな、おじいちゃんに助けてもろうたんやで。やさしゅうしてくれたったわ。」
おかあさんは、不思議そうな顔をしましたが、
〝ぽん太が無事であって良かった〟
と、思いました。
「おっかあ、すべぼうき借りてきたで。これでいぼが治るんやろ？」
「ああそうや。おおきに、ぽん太。」
「早ういぼが治りますように。」
と、ぽん太はすべぼうきでおかあさんのいぼをなでてあげました。
次の日も、その次の日もなでてあげました。
でも、なかなかいぼはとれませんでした。

「早ういぼが治りますように。早ういぼをとって下さい。」
ぽん太は、何日も何日も、おかあさんのいぼをすべぼうきでなでてあげました。

山の雪も溶け、つつじや山吹の花が咲いて、すっかり春になりました。
「ぽん太、ぽん太。起きておっかあの足を見ておくれ。」
その声で目を覚ましたぽん太は、おかあさんの足を見てびっくりしました。
「うわぁ、いぼがとれたやんか。大きないぼも小さいいぼもきれいにとれた。おっかあ、よかったよかった、よかったなぁ。」
「おおきに、おおきに。ぽん太のおかげじゃ、清水薬師さんのおかげじゃ。ありがたいことや。」
おかあさんだぬきは、ぽん太をぎゅうっと抱きしめて喜びました。

おかあさんの足のいぼもすっかり治って、しばらくたったある日の夕方、親子のたぬきは、清水薬師さまへお礼に行きました。
「お薬師さん、おかげさんでいぼがきれいにとれました。ほんまにありがたいことです。」
「お薬師さん、おっかあのいぼを治してくれたっておおきに、おおきに。」
親子のたぬきは、手を合わせてお礼を言いました。
その時、田んぼの方から鐘や太鼓の音が響いてきました。

カンカンカン　ドンドンドン
さねもりさんが　ごーしょらく
いーねのむしは　おーともせい
カンカンカン　ドンドンドン

火のついた松明（たいまつ）を持ったおおぜいの村の人達が、畦道を並んで歩いているのが見えました。

「おっかあ、あれ何や？」

「あれはな、『稲の虫送り』いうて、松明にあかりをとぼして、悪い虫を集めてやっつけるんやで。お米になる大事な稲が、悪い虫に食べられんようにな。」

「ふうん。」

「あないして、村の人達が大事に大事に育てた稲で、清水薬師さんのすべぼうきを作るんやで。」

「そうか。清水薬師さんのすべぼうきをな。」

たぬきの親子は、もう一度清水薬師さまに手を合わせました。

日もとっぷりと暮れ、松明のあかりが水面にちらちらと揺れていました。

今でも、清水薬師さまは『いぼ薬師さま』とも呼ばれ、人々が立ち寄っては、手を合わせている姿をよく見かけます。どんないぼでも治して下さるお薬師さんじゃ、ありがたいありがたいお薬師さんやと、おおぜいの人々がご利益を受けに、清水薬師さまにおまいりされております。

※ 中野間の通称よそべ谷の麓の県道淵には、薬師如来がおまつりされており、谷間から流れる清水が年中たえないことから『清水薬師』と名付けられ、イボ、ソバカス、ホクロ等を治して下さるあらたかな如来様で、おまいりする人も多い。と、八千代町史にあります。お供えしてあるすべぼうきでイボをはきなでてお願いし、イボが治るとお礼に新しいすべぼうきをお供えするということです。

雨散散（ウバラバラ）

昔、山奥の下三原という小さな村に、六月ごろになると、あちらこちらの田んぼから、こんな歌が聞こえてきました。

あぜごしに
水がゆらゆら
ヨイトコウリャ
この田にお米が
八石（はーちこく）
チョンコ
チョンコ

猫の手も借りたいほど忙しい田植どきになると、太郎とお咲の兄妹も、朝早くから暗くなるまで、一生けん命に、苗運びを手伝いました。

そうした忙しい日が、しばらく続いた後は、またもとどおり、のどかな毎日が過ぎました。

ある年のことです。何日も何日も雨が降らず、田んぼの土がパサパサになってきました。

日が暮れる頃、田んぼからお父さんが帰ってこられました。

「おっとうおかえり、しんどかったやろ。心配そうな顔しとってやけど、どないしたったんや。」

「田んぼに水がのうて、村の衆が困っとるんや。どうしたもんかのう。」

「ふうん、どっこの田んぼにもないんか。」

「長いこと雨が降っとらへんでな。」

その夜も、次の夜も、空には雲一つなく、星がピカピカ光っていました。田や畑にやる水だけでなく、自分達の飲む水さえ少なくなってきたのです。村

の人達は、困りはてて、集まって相談をしました。

「雨が降らんと、井戸の水もないようになるぞ。」

「ほんまや、飲む水もないようになったら、どないしたもんやろ。」

「稲は枯れかけよるし、大豆もあかんぞ。」

「困ったなあ。」

「ほんまに困ったのう。」

「こないなったら、ありがたい八幡さんにお願いして、雨を降らしてもらおうやないか。」

「せやな、八幡さんやったら、きっとかなえてくれてやで。」

――なんでも昔に、日照りの日が続いた時に、八幡さんにお願いして、雨を降らしてもらったことがあったそうです。――

そこで、村の人達みんなで、八幡さんにお願いすることになりました。

さっそく、八幡さんの境内に集まり、村一番の古老、源助じいさんの指示で、準備にかかりました。

ある者は、大きな釜、ある者は、藤かづら、シキミ、お供え物と、次々と境内に運び込まれました。一緒にきていた子どもたちは、いったい何が始まるのかと、目を見はらせていました。

すると、源助じいさんが、

「その大きな釜に、水をどっさり入れて、湯をどんどん沸かすんじゃ。そいでな、水蒸気で雨を降らしてくれる雲と、神様を呼ぶんやで。」

と、言いました。

それで、大きな釜に、たっぷりと水が入れられ、パチパチと音をたてて、火が燃えはじめました。薪も次々とくべられ、一段と火の勢いも増し、ぐらぐらと湯が沸き出しました。

「もっと　もっと湯気を出すんやで。」

「よっしゃ。」

大きな釜から、白い湯気がモウモウと上がり、上へ上へと昇りはじめました。まるで雲のように空いっぱいに広がっていきました。

子どもたちも、始めは遠くから見ていましたが、何か手伝いたくて仕方ありません。だんだんと釜に近づいて行きました。

「わあ、よう沸っきょるなあ。」

「ぶくぶく　ぐらぐらしよる。」

「早う雲に乗って、神様きてないかなあ。」

そう言って、空を見上げていると、

「おうい、手のあいとる者は、こっちへきてくれんか。」

と、源助じいさんが呼びました。

「今度は、何するんや。」

「あのな、湯が沸っきょる間に、この藤かづらで、こうやってな鎖を作るんじゃ。」

「なあ、おら達も作ってええか。」

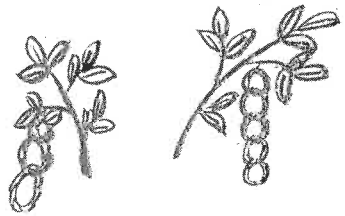
「ああ、手伝うてくれ。」

「うん。」

「これを三つつなぐと三石でな、五つつなぐと五石と言われ、それぐらい米がたくさんとれますようにとお願いして、それをシキミの小枝につけるんやぞ。」

大人も子供も、お米がたくさんとれるようにと、一生けん命作りました。

準備が整うと、いよいよ源助じいさんが、お祈りを始めました。みんなも、シキミの小枝を高く奉げて、一緒にお祈りをしました。



謹迎再拝再拝敬ッテ申ス……

難しいお祈りが終わると、源助じいさんが、何やら手にして、みんなの前に出てきました。

「みんな、これは、ありがたい御神酒じゃ。みんなに振り掛けるでな、掛かったら『雨散散　雨散散』と、言うんじゃ。わかったな。」

そう言って、神木盃に入った御神酒を、蓮木状のすりこぎで、パラパラ　パラパラと振り掛けました。境内のあちらでも、こちらでも、

雨散散　雨散散

と、にぎやかな声が聞こえてきました。太郎もお父さんの側で、〝早く雨が降りますように〟

雨散散　雨散散

と、祈りながら手を合わせました。

やがて、お祈りも無事終わり、

「このシキミを持って帰って、田んぼの水口に挿し、一日も早う雨が降るようにお願いするのやぞ。」

源助じいさんが言うと、村の人達は、ありがたいシキミの小枝を手に、次々と家に帰って行きました。

それから、四・五日たった、ある日のことです。

「兄ちゃん、いつになったら雨が降るんや。」

「そうやな、お咲、あの田んぼのシキミに、雨降らして下さい言うて、もう一回お願いしに行こうか。」

「うん、行こう行こう。」

二人が田んぼにつくと、山の向こうが、だんだんと暗くなってきました。

「兄ちゃん　見てん、黒い雲や。黒い雲が出てきたで。」

「ほんまや、きっと雨を降らしてくれる雲やで。」

「なあ　兄ちゃん、神様も乗っとってのとちがうか。」

「うん、そらあきっと乗っとってやで。」

「雨ようけ降ってくるかな。」

その時です。

ピカ　ゴロゴロゴロゴロ

「きゃあ　兄ちゃん恐い。」

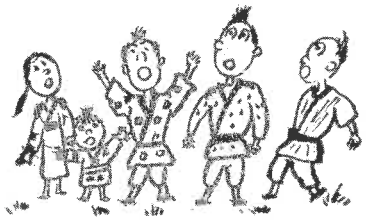
「大丈夫や、お咲へそ取られんようしっかり押えときよ。」

「うん、おへそギュッと押えとくわ。兄ちゃんも取られんように、おへそ押えときよ。」

ピカ　ゴロゴロゴロゴロ

雷が鳴って、ポツン　ポツンと、大粒の雨が降ってきました。

「あっ　雨や。」
「ほんまや、雨や雨や。」
「わあ　ようけ降ってった。もっと降れ、もっと降れ。」
二人は、雨の中を走り回って喜びました。
お父さんやお母さん、村の人達も外に飛び出してきました。
「やっぱり八幡さんは、わしらを助けてくれたったんや。」
「ほんまや、八幡さんのおかげや。」
「八幡さんは、ありがたい神様や。」
「ありがたいこっちゃ。ありがたいこっちゃ。」
「もっと降れ、もっと降れ、どんどん降れ降れ。」
村の人達は、手を振り狂ったようになって、その辺りを飛びまわりました。



そして、それからは、毎年水に困らないようにと、年の始めに、雨散散の行事を行うようになったということです。
今も、引き続いて行われています。

雨散散　雨散散

※ 元日の朝、下三原の貴船神社では、昔から『雨散散』という行事を行う風習があります。
それは、約二百年前「天明年間」に、干魃に見舞われ、田畑は枯渇し、農民は危機に陥った。雨乞いの為、茲雨をもたらし、五穀豊穣祈念の為、村人一同が氏神様の八幡大菩薩（元禄七年建立、明治の中期に八幡大明神と改称）に祈願したことが始まりと言われています。　―　下三原の古文書　より　―

夢の宝物

むかし、むかしのおはなしです。
いくつもいくつも重なりあった山々のふもとに、細長くのびた野間谷村がありました。そんな谷あいの村に、仙太がおじいさんと二人で暮らしていました。
仙太の家の裏山は、春になると白いこぶしの花が、一面に咲き、秋になると赤や黄色のはっぱでいっぱいになるとてもきれいな山です。
この山を村の人達は『城山』と呼んでいました。
仙太は、おじいさんの畑仕事の手伝いが終わると、仲良しの友達と、いつも一緒に遊んでいました。
「おい、みんな、今日は城山へ登ってみようか。」
「あんな急な山登れるのか。」
と、言うと、
「細い道がありそうやから登れそうやで。」
「ふーん、細い道か。べっちょないか。」
「べっちょない。べっちょない。」
と、仙太が言いました。
仙太達は、あぜみちを通って山道にさしかかりました。背丈ほどの木々をかきわけながらのぼっていくと、だんだん急な坂道になってきました。
両側には、大きな木が生え、うっそうとしていました。
「仙太ちゃん、道わかるのか。」
と、心配そうに言うと、
「おらの後からついてこいよ。」
と、言いました。
仙太達は、なんべんもなんべんも滑ったり、草履が脱げそうになったりしながら登っていきました。
岩の間からちょろちょろと、山水の流れているのが見えました。

「ああしんど。ここらでちょっと休もうか。」
「おら、のどが乾いた。この水飲んでいこう。」
「そうやな。」
　ゴクン、ゴクン、ゴクン、
「ああ、おいしい。おなかにしみとおるなぁ。」
「さあもうちょっとや、登ろうか。」
　木のえだが風に吹かれてさわさわとなりました。
どこからかひよどりの鳴き声が聞こえてきました。
「やっとてっぺんに着いたで。」
「やったぞ。やったぞ。」
「うわぁー、高いなぁ。」
　仙太たちは、石の上に腰をかけて休みました。
「風が吹いて、ええ気持ちやなぁ。」
「ほんまやなぁ。」
「仙太ちゃん、その木の上見てん。」
「あっ、りすや、かわいいな。」
　仙太は、りすの方へとんで行こうとして、つるりとすべってしまいました。
「あっ、いたたた……。」
「どうもないか。」
「らっきゃ、らっきゃ、ちょっとお尻をうったけどべっちょない。」
と、仙太は、土を払いながら起き上がりました。
「あっ、仙太ちゃん、こんなとこに石垣が続いとるで。」
「こんな山の上に、なんで石が積んであるんやろ。」
「さあー、お城が建っとったんと違うか。」
　仙太達は、とても不思議に思いました。
　家に帰って、仙太は、おじいさんに聞きました。
「じいちゃん、友達と城山へのぼったんやけど、てっぺんに石垣がずうっと続いてあったで、お城が建っとったんか。」
「おー、仙太、あの急な城山へのぼってきたんか。そうや、あそこにはのう、野間城いうてな、有田左衛門というお殿様が建てたった立派なお城があ

ったらしいぞ。」
「へえー、野間城いうのか。」
「それで、野間城には宝物が、ぎょうさんあったそうや。」
「えっ、宝物、どんな宝物や。」
すると、おじいさんが、
「きれいな絵図や、金でぴかぴか光った玉や、鳶や茶釜で、それはそれは見事なもんやったらしいで。」
と、言いました。
「どんなもんか見たいなぁ。」
「むかしはお城の取り合いでよう戦いがあってのう。その度に宝物を敵にとられんように、家来たちがあちこちに隠していたというこっちゃ。」
「へえー、えらいことやってんなぁ。」
　その晩、仙太は、おじいさんから聞いた宝物の事を考えながら、いつの間にか寝入ってしまいました。
すると、あたりがぼうっと明るくなり、目の前に、お城があらわれました。
　仙太は、ちょんまげを結い、刀を差した家来になっていました。
　何か起こったようで、あたりはものすごい騒ぎです。家来達が、大きな声で叫びながら、走りまわっています。
「さあ、戦いが始まるぞ。」
「敵は別所勢じゃ。」
「なに、三木の別所か。」
「うん、そうじゃ。」
それを聞いた仙太は、慌てて殿様に知らせました。
「殿様、殿様、大変です。敵が攻めてきました。」
「なに、敵が攻めてきた。」
「はい、もうそこまで来ています。」
「それは大変じゃ。この城に伝わる大切な宝物は、何としても守らねばならんのじゃ。仙太、宝物を持って早く逃げてくれ。」
「はい、わかりました。」

仙太は、ぴかぴかと光る金の玉を持って、敵に見つからないように、お城を出ました。

刀を振りかざした大勢の侍たちが、もうそこまできておりどうすることもできません。

とにかく、山を下りなければなりません。仙太は城の北側へ急ぎました。ここは屏風を立てたように切り立った岩ばかりで、簡単に上り下り出来るようなところではありません。

そこはもう火がつけられ、すぐそこまで燃え上がってきていました。

「えらいこっちゃ、城が焼けてしまうぞ。」

「はやく火を消すのじゃ。」

「水はないしどうしたらいいのじゃ。」

家来たちはどうすることも出来ず、一番大切な米俵までも落として、城を守ろうと山の上から転がしました。

「早く落とせ。ぐずぐずするな。」

「急げ　急げ。」

山の上から俵をころがしているのを見た仙太は、

「そうや、あの俵の中に隠れて山をおりたら助かるかもしれへん。」

と、たいせつな宝物をしっかりとかかえて、積んである俵の中へ隠れました。

お城の家来達は、仙太が隠れていることにすこしも気づかず、次々と俵を転がしていきました。

ゴロン　ゴロン　ゴロン

俵は岩の上からすごい勢いで、転がっていきました。

仙太は、転がっていく俵の中で、

「助けてー　助けてー。」

と、さけび続けました。

「仙太、仙太、どないしたんや。」

仙太のさけび声にびっくりしたおじいさんは、仙太を揺り起こしました。

「ああ、夢か。おら、金の宝物持って逃げよったんや。」

「何いうとるんや、宝物って何のことや。」

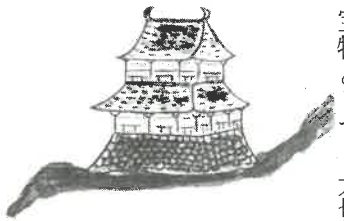
「おじいちゃんに聞いた野間城の宝物やんか。」

「ああそうか、それでえらいうなされよったんやのう。」

と、おじいちゃんはにっこり笑いました。

野間城は、別所勢により焼かれてなくなってしまい、金の宝物の行方は分かりませんが、今も昔話として、語りつがれています。

絵図は無事に残り、その後に再建された極楽寺に預けられ、今も寺の宝物として、大切に保存されています。



※ 貞治元年（1362年）赤松則村（入道円心）の曽孫有田左衛門督重友が、はじめて中野間に城を築いて多可、加西、加東の三郡を領有した。以後六代百五十九年続き、代々の城主は赤松氏直系の一族として、赤松一門にことあるたび出陣していた。しかし、天正三年に別所長治に攻められ落城する。落城当時に宝物を埋めた、また、持って逃げたという伝説が残っている。

『老人会発行のふるさと探訪』より

東向き地蔵さま

仕出原の村はずれに、お地蔵さまが立っておられました。このお地蔵さまは、お日さまの昇られる東の方を向いて、にっこりほほえんでおられるようでした。赤いよだれかけをされ、いつもきれいな花がお供えしてあるのでした。

そのお地蔵さまの所へ、山で遊んできた村の子どもたちが、手に手に木の棒を持って降りてきました。

「えいっ！」

「やぁ！」

「とぉ！」

チャンバラごっこを始めました。

「それぇ！」　〝バシッ〟

「やられたぁ。」

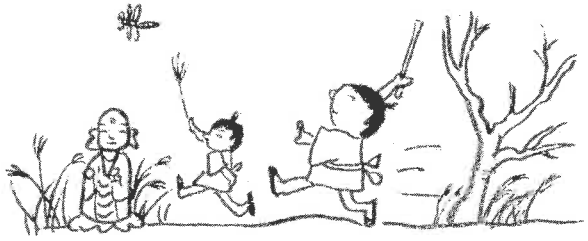
「今度はおらがいくぞ。トオ！」

けん太は、一刀流に構えると、素早く振りおろしました。

〝ボコン〟

「あっしもうた。えらいことしてしもた。お地蔵さまをたたいてしもた。」

けん太ちゃんの振りおろした棒が、お地蔵さまの頭に〝ボコン〟と当ってしまったのです。



「けん太ちゃん、思いきりたたいたからお地蔵さま痛い言よってやで。」

「ほんまや、お地蔵さまごめんな。」

けん太は、あわててお地蔵さまの頭を撫でて謝り

ました。そして、そおっと顔をあげてみると、にこにこ笑っておられるのです。

「あっ笑とってや。」

けん太は、ほっと安心しました。

「けん太ちゃんよかったな。」

「せやけど痛かったやろな、今度から気をつけるさかいな。」

と、ぺこんと頭を下げて、また　エイ！、ヤァ！と遊びながら行ってしまいました。

秋風が吹き、すすきの穂がさわさわとゆれていました。

しばらくすると、田んぼのあぜみちを、お里ちゃんが菊の花を抱え、おばあちゃんといっしょにやって来ました。

「おばあちゃん、この菊きれいやな。ああ、ええ匂いやわぁ。」

お里が、菊に顔を近づけて匂いをかぐと、ほのかに甘い香りがしました。

「お里は花が好きやのう。」

「大好きや。この菊はお地蔵さまにお供えしてんやろ。そしたら、お地蔵さまもええ匂いやって言うてやろな。」

「おっほほほほ、そうやな。」

あかいきく　ひとつ
きいろいきく　ふたつ
しろいきく　みっつ
おにわにさいた

「おばあちゃん、足痛うないか。」

「ああ、大丈夫や、だいぶようなってきたで。」

そんな話をしながら、お地蔵さまの所までできました。おばあちゃんが、早速お地蔵さまの周りの掃除をされるのを見て、お里ちゃんも手伝いました。そして、持ってきた花をお供えして、線香を立てるとおばあちゃんは手を合わせて、

「おかげさんで足もようなってきました。ありがとうございます。」
と拝みました。
お里ちゃんも、
「おばあちゃんの足がはよう治りますように。」
と頭を下げました。
「お里も拝んでくれるか、ありがとうよ。」
おばあちゃんは、にこにこしながら、お里ちゃんの顔を見つめました。
「おばあちゃん、お地蔵さまは何でも願いをきいてくれてんか。」
「そうや、このお地蔵さまはな、ありがたいお地蔵さまなんやで。」
「ふーん、そうか。」
おばあちゃんは、そばの石段に腰を降ろすと、昔を思い出すかのように遠くを見つめながら、お話をしました。
「おばあちゃんがな、まだ子どもで……、そうやな丁度お里ぐらいの頃やろか。この辺の田んぼは、どこもどろんこの田んぼでな、土田というてな、お米を作るのにそれはそれは大変やったんやで。」
「どの田んぼもどろどろやったんか。」
「そうや、膝の所まで土がずりこんでな、前へ行こう思うてもなかなか歩かれへんのや。」
「へえー、膝の所までドボドボーと入ってしまうんか。」
お里ちゃんは立ち上がって、おばあちゃんの膝の前で目をパチクリさせました。
「ずうっと昔はな、仕出原はシドロ原と言われとったそうや。」
「シ・ド・ロってなんや。」
「シドロ言うたら、いつも水がたまっとってじめじめしとることや。」
「それで、そのシドロ原が仕出原と言われるようになったんやな。」
「そうらしいで、そのどろどろの田んぼで、村の人

たちはよう働いたったもんや。朝から晩まで体中どろんこになってな、一生けんめい田んぼを耕したったんや。」
「えらいことやったんやなぁ。」
「せやからな、働きすぎて腰が痛とうなったり、熱をだして病気になる人もあったんや。村の人は困ってしもたってな、なんとか病気を治したい、はよう元気になりたいと思い、お地蔵さまをおまつりしてお願いしたったんや。」
「病気は治ったんか。」
「毎日一生けんめい拝んだった、そしたら何日かすると、すっかりようなったったんやで。」
「ほんま、よかったなあ。」
お里ちゃんは、しみじみそう思いました。
「みんなお地蔵さまのおかげじゃ言うてな、お礼に赤いよだれかけを掛けておまつりしたったんや。」
「それで、よだれかけをしとってんか。」
「このお地蔵さまはな、東の方を向いて立っておられるやろ。それで東向き地蔵さまと呼ばれ、困った時にはな、何でも願いをきいて下さるお地蔵さまだと、沢山の人がお参りするようになったんや。」
「東向き地蔵さんか……、そうやったんか。」
お里ちゃんは、お地蔵さまの所へ行き、じっくりお顔を見つめました。
「おばあちゃん、お地蔵さまはほんまに優しい顔をしとってやな。」
「そうやろ。」
おばあちゃんもいっしょに、優しく微笑みました。
「お地蔵さま、ありがとうございました。」
お里ちゃんは、もう一度手を合わせました。
おばあちゃんの話を聞いてから、お里ちゃんは道端の野花を摘んでお供えしたり、おかしをもらった時は、一つお地蔵さまにお供えしました。この道を通る時はいつも、
「おばあちゃんの痛い足が、はよう治りますように。」

「今日も怪我をしませんように。」
と拝むのでした。

東向き地蔵さん
　何でも願いをかなえてや
東向き地蔵さん
　いつもにこにこ笑ってござる

こんな歌が、赤や黄色の葉っぱといっしょに風にのって聞こえてきました。

※その昔、仕出原は、シドロ原といわれる程沼地であった。東向き地蔵さまが立っている所には百マチの田んぼがあったが、鶴林城へ攻める敵の馬が、この田で動けなくなり多勢死をとげた。又、米作りも大変だったそうな。

（村の人から聞いた話）

大屋博多

むかし、むかしのおはなしです。

笠形山のずうっとふもとの大屋村というところに、重兵衛さんと、おっとう、おっかあの三人が、仲良く暮らしておりました。

重兵衛さんのおっとうは糸屋と呼ばれ、山を幾つも幾つもこえ、海のむこうの博多という町へ、生糸を売りに行く仕事をしていました。その生糸は、博多織といって、とてもきれいな帯に織られるのです。

重兵衛さんも大きくなって、おっとうの仕事を手伝うようになりました。

おっとうは、生糸をいっぱい入れた大きな風呂敷包みを背負い、

「どっこいしょ　よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

重兵衛さんは、おっとうよりこまい風呂敷包みを、

「どっこいしょ　よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

と、背負って歩いて行きました。

「おっとう、博多にはいつ着くんや。」

「そうやなぁ。遠い遠いとこやから、十回は寝んと着かへんぞ。」

「えっ、そんな遠いとこか。そいで、どこで寝るんや。」

「宿屋いうてな、泊まるとこがあるんや。」

「ふうん、宿屋か。」

と話ながら、どんどん　どんどん歩いて行きました。

歩き疲れて日が暮れると、宿屋でゆっくり休み、また次の日も、頑張って歩いて行くのです。

「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

「ああしんど。おっとう、もうちょっとで博多か。」

「そうやな、だいぶ歩いてったけど、まだまだ遠いぞ。」
「えっ、まだまだか。」
重兵衛さんとおっとうは、村を抜け、山を越えて、何日も何日も歩き続けました。

舟に揺られ、海も渡って行きました。
そんなある日のことです。
重兵衛さんとおっとうが、一生懸命歩いたのに、その日は、大きな木がいっぱい生えている山の中で、日が暮れてしまったのです。
「おっとう、こんな山の中に宿屋があるんか。」
「今夜は、この山の中で寝なしゃあないな。」
「えっ、おら恐いわ。」
真っ暗な山の奥からは、ホー　ホーとふくろうが鳴き、ウオー　ウオーと、おおかみの恐ろしい鳴き声が聞こえてきます。重兵衛さんは、おっとうにぎゅうっとしがみつきました。
「おっとう、恐い恐い。」
と言いながら、いつの間にか、おっとうのあったかい胸の中で眠ってしまいました。

チュンチュン　チュンチュン
「重兵衛おはよう。夕べは恐かったやろ。」

「いいや、おっとうと一緒やったから恐いなかったわ。」
「ええっ、そうか？　さあ、博多までもうちょっとやぞ。」
「うん。」
「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」
「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」
やっと、博多の町に着きました。
「毎度、大屋の糸屋ですが、頼まれとった生糸を持ってきました。」
「まあまあ、遠いとこごくろはんやったな。大屋の糸はほんまにええ糸やから、きれいな帯が織れて、みんなに喜んでもろとるんやで。」
「重兵衛ちゃんも小さいのに、おとうさんの手伝いしてえらい子やなあ。」
そう言われると重兵衛さんは〝遠いとこしんどかったけど、おっとうの手伝いして良かったな〟と、とてもうれしく思いました。

何べんも何べんも、博多へ生糸を売りに行くうちに、重兵衛さんも立派な若者になりました。
山の木が、赤や黄色のきれいなはっぱに色着いた頃です。
大きな風呂敷包みを背負った重兵衛さんとおっとうが、山道を歩いていると、急に空が暗くなって、ポツリ　ポツリ　ポツポツと雨が降ってきました。
「わぁ　えらいこっちゃ。大事な生糸を濡らしたらあかんぞ。」
重兵衛さんとおっとうは、着物を脱いで風呂敷の上に巻き、裸で山道を走っておりました。
「重兵衛、この坂の下の宿屋まで頑張れ。」
二人は、フウフウ言いながら駆け下りて来ました。
それで、大事な大事な生糸は濡らさずにすみました。
そして、その日は坂の下の宿屋に泊まることにしました。

次の日の朝、昨日の雨もすっかり上がり、赤や黄

色の葉っぱから落ちる雨の滴が、朝日に光っています。

「わぁ、キラキラしてきれいやなあ。」

「さぁ、おっとう行こか。夕方には博多へ着くやろな。なあ、おっとう。」

でも、おっとうは、赤い顔をしてまだ布団の中です。昨日、雨の中を、裸で走ったのが悪かったのか、高い熱が出たのです。

「おっとう　大丈夫か。」

「ああ、大丈夫や。」

と、起きようとしましたが、ふらふらとして立ち上れません。

「おっとう、無理せんとき。おらが、おっとうの生糸も持って行ったげるから。」

「えっ、おまえ一人でらくか。」

「らっきゃ、らっきゃ。おら力持ちやで、おらにまかしとき。」

重兵衛さんは、おっとうと二人分の大きな風呂敷包みを、

「せえの、どっこいしょ。」

と、持ち上げようとしましたが、

「おっとっとっと。」

ドシーンと、尻もちをついてしまいました。

「あいたたた。やっぱり二人分は重たいな。」

「そりゃ重たいから無理やろ。」

「さぁ、もういっぺんや。せえの、どっこいしょ。」

やっと、重兵衛さんは風呂敷包みを背負いました。

「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

重兵衛さんは、汗だくで山道を登って行きました。山のてっぺんに立つと、冷たい風が、汗で濡れた肌にとってもいい気持ちです。

「あっ、博多の町が見えてきたぞ。」

「よいしょ　こらしょの頑張れ頑張れ。」

「よいしょ　こらしょのどっこいしょ。」

やっとのことで、博多に着きました。

「わぁ、着いた。着いた。」

重兵衛さんは、たくさんの生糸を博多へ届け、とても喜んでもらいました。

けれども、おっとうのことが心配で心配で、急いで宿屋へ帰りました。

「おっとう、ただいま。どないや熱は。」

「ゆっくりと休ませてもろうたお陰で、大分ようなったわ。ほんまにすまんこっちゃったな。」

「いいや、ええねんで。ようけ生糸持って行って、ものすごう喜んでくれたったわ。」

「そうか、そうか、ごくろはんやったな。喜んで買うてもうたら、ほんまにうれしいこっちゃ。」

「うん、うれしいこっちゃけど……。なあ、おっとう、えらいめにおうて、遠い遠いとこまで持って行かんでも、おら達が住んどる大屋村で、博多織を織ったらどないやろ。」

「えっ、大屋で博多織を織る？　なに寝ぼけたことを言うとるんや。なんにも知らん者に、難しい博多織が織れるはずがないわ。」

「それやったら、職人さんに大屋村まで来てもろて、博多織を教えてもろたらええやん。」

「せやけど、博多から、大屋みたいな遠いとこへ来てくれてやろかの？　」

「来てくれたったらええのになぁ。」

大屋へ帰ってからも、重兵衛さんは、大屋村で博多織を織ることばかりを考えていました。

何年かたちました。

「おっとう、やっぱり博多の職人さんに大屋村へ来てもらおう。おら、今から行ってくるわ。」

ある日、重兵衛さんは、博多へ出かけて行きました。

「職人さん、どうか博多織を教えて下さい。」

「大屋村へ来て下さい。お願いします。」

と、何べんも何べんも、頼みました。

重兵衛さんが一生懸命に頼んだので、とうとう博多から三人、また博多の近くの小倉から一人の職人

さんが、大屋村へ来て下さいました。そして、大屋村の自分の家で、博多織を教えてもらうことになりました。

キーパタン　キートントン
キーパタン　キートントン

しかし、重兵衛さんは、博多の大名に『大屋村で博多織を織る』ということは言わずに、こっそりと職人さんに来てもらっていたのです。だから、それを知った博多の大名は、

「うちの博多織を、勝手に大屋村で織るとは何事だ。許さぬぞ。」

と、かんかんに怒り、職人さんを捕まえにやって来ました。

「重兵衛、えらいこっちゃ。職人さんが捕まえられるぞ。」

「えっ、ほんまかおっとう。」

「ああ、早う職人さんと機を、見つからんように隠すんや。」

重兵衛さんは、慌てて職人さんをよその家へ、機を隣村の坂本に隠しました。

「博多の職人はどこだ。」

「どこに隠した。」

「何とかお見逃し下さい。」

「それはならぬ。」

「どこに隠した。」

「おーい、こっちにいたぞ。」

「それ捕まえろ。」

「捕まえろ。」

博多から来てもらっていた三人の職人さんは、すぐに捕まってしまい、博多へ連れ戻されてしまいました。

しかし、坂本に隠した機と、小倉から来てもらっている一人の職人さんは、何とか見つからずにすみました。重兵衛さんは、一人残った小倉の職人さん

に、機織りを教えてもらいました。すまない事をした博多の職人さんの分まで、頑張って機を織りました。

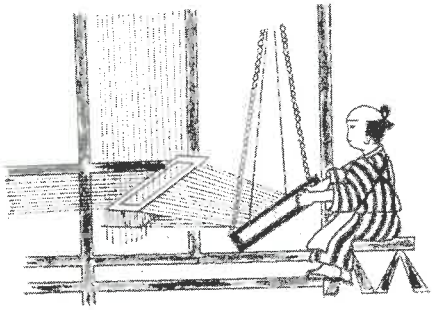
キーパタン　キートントン
キーパタン　キートントン

毎日毎日、休まずに
織り続けました。

「重兵衛はんが織ったった帯、きれいな帯やな。」

「うん、ほんまに
ええ帯や。うぅん。」

重兵衛さんが
苦労して苦労して、
博多から持ち帰り、
大屋村で始めた



『大屋博多』その大屋博多の帯は、大勢の人々に大変喜ばれるようになりました。

キーパタン　キートントン
キーパタン　キートントン

竹に雀は　しなよく止まる
止めて止まらぬ　この思い
何を言うてのじゃ　日の出のわしに
おまえ入日の　身じゃないか

キーパタン　キートントン
キーパタン　キートントン

いい声で唄う職人さんの声にまじって、大屋博多の機の音が、山々にずうっと響きわたりました。

※ 北播には、かって「博多織」が重要な産業の一つとして栄えていた。その創業者、市位重兵衛は絹糸商の家に生まれ行商をしていたが、丹波糸を使って郷里で博多織ができないものかと考え、小倉から一人、博多から三人を招いて技術指導を仰いだ。しかし、この当時の博多織は、藩から将軍への献上品で、献上品としての稀少価値を維持しょうとした福岡藩は、藩吏を派遣。三人の職人は連れ戻され入牢、獄死という結果をまねいた。幸い大屋村は天領であったため重兵衛は難を逃れ、小倉から来た一人が残って職人を養成。大屋博多は、重兵衛が基礎を築き二代目、三代目にかけて全盛期をむかえた。重兵衛の功績は、西脇を中心とした播州織にうけつがれている。

大野博多と高野豆腐
―八千代町産業発達史―より

てんどろ谷の天狗

むかし、むかし、上三原の岩戸という山に、てんどろ谷といって、あまり人が近寄らない深い谷がありました。

秋もくれて、すすきの穂が真っ白になる頃、正太は、おっとうと山へたき木拾いに出かけました。

カサッ、カサッと落ち葉を踏みしめながら、杉林に着きました。

「もうこの辺でええやろ。もうじき冬が来て寒うなるさかいに、たきもんようけひらうんやで。」

「うん。」

「正太、おまえにはいっつも手伝わせてすまんのう。」

「いいや、ええで。おっかあの分までいっぱいひらうからな。」

そういうと、正太は、一生懸命たき木拾いをはじめました。

しばらくたって、ふと仕事の手を止めた正太は、遠くの山をみつめました。

「おっかあは、あの山の向こうに行っとってんか。」

「ああそうや。あの山を越えたずっと向こうの養生所に入っとるんや。寂しいやろうけど、我慢するんやぞ。」

「うん。」

と、元気よく返事はしたものの、正太は、おっかあが恋しくてたまりません。

「おっかあ。」

と、重なり合った山に向かって、大きな声で叫びました。その声は、二重になり三重になって山々にひびいていきました。

「こらこら正太、そんな大きな声出したらあかん。」

「なんでや、おっとう。」

「この奥のてんどろ谷には、天狗がおるんや。」
「天狗？天狗いうて何や。」
「天狗いうたらな、赤い顔でな、鼻が高うて、鳥みたいに空を飛ぶそうや。」
「えっ、ほんまか。」
「ああそうや。てんどろ谷にはな、天狗松というて、天狗が止まる高い松の木があるんや。」
「ふうん。」
「ある日、てんどろ谷へ行った人が道に迷うてな、困ってしもうて、大きな声で叫んだそうや。そしたら、その高い松の木に天狗が現れてな、返事をしたそうや。」
「ふうん、それからどないしたったんや。」
「もう、そりゃびっくりしてしもて、どこをどのように走ったかもわからへんけど、山から逃げて帰ったったそうや。その晩からえらい熱が出てな、三日三晩も熱は下がらへんかったということや。」
「それはえらいことやったんやな。」

「その話しを聞いた村の人達は、てんどろ谷には怖い天狗がおるいうてな、それからは、誰も行かへんようになったんや。」
「へえ、そんなことがあったんか。」
その晩、正太は、天狗の夢を見ました。夢の中の天狗は、正太の顔を見て笑いかけているようでした。

次の朝早く、正太はたった一人で、てんどろ谷へ出かけて行きました。
天狗が本当にいるかどうか、確かめたかったのです。
正太の背丈ほどもある、すすきの野原をかきわけてんどろ谷の奥へと、どんどん入って行きました。
木立の間をあちこち探しているうちに、杉林の中に、一本ぬき出た高い松の木が見えてきました。
「天狗松いうのはあれのことかな、大きな木やな。」
正太は、恐る恐る松の木に近付いて行きました。あたりをそーっと見回して、ちょっと小さな声で、

「おーい、天狗さーん。」
と呼んでみました。返事はありません。もう一回前より大きな声で
「おーい、天狗さーん。」
と呼んでみました。
すると、

突然、ごーっとあたりを震わす強い風が吹いて、木の葉がバラバラと落ちてきたかと思うと、正太の目の前に、顔が赤くて、鼻の突き出た天狗が立っているではありませんか。
「わあ、て、て、てんぐや。」
正太は、おもわず目をつぶりました。
「俺を呼んだのはおまえか。」
初めて天狗を見た正太は、びっくり仰天、胸がはりさけんばかりの驚きでしたが、勇気を出してそっと目をあけてみました。
「おまえ、俺が怖いか。」
「う、うん。」
「村の者は、みんな俺の姿を見ると逃げて行くが、大丈夫だよ、怖がらなくてもいいぞ。」
正太は、怖々言いました。
「わ、わし、天狗さんと友達になりたいんや。」
「俺と友達にか。」
「うん、一緒に遊びたいんや。」

少し驚いたが天狗は、勇気のある正太が好きになり友達になりました。

冬が過ぎ、こぶしの花で山が白くなる頃、いつものように、てんどろ谷へ遊びに行った正太は、

「天狗さーん、天狗さーん。」

「おーい、ここやで。」

と言うと天狗さんは、木からさっと鳥のように、飛び降りてきました。

正太はとなりのおばあちゃんにもらったかしわもちを、ふところから出して、一つ天狗さんにあげました。

「人間はこんなうまいもんをたべとるんか。」

「うん。おいしいやろ。」

正太は　ニコニコ……

天狗さんも　ニタニタ……

「天狗さんは空を飛べてええなあ。」

「そうや、どこへでも行けるんや。」

「ふうん、せやけどこんな山の中で、一人ぼっちで寂しくないんか。わしは、おっかあが……。」

と言いかけましたが、あとは声がとぎれてしまいました。

「正太のおっかあは病気か、それともどっかへ行ってんか。」

「あの山を越えたずーっと向こうの養生所に行ってのんや。」

「そうか。正太はおっかあに会いたいやろな。」

「そらぁ、会いたいわ。」

「そんならわしが、今からおっかあに会いに連れて行ったろう。」

「えっ、それでもすごく遠いんや。あの山のずっと向こうなんやで。」

「大丈夫、わしにまかしとき。わしは空が飛べるんや。正太、わしの背中にしっかりつかまっとくのやで。」

正太を乗せた天狗は、風をごーっと吹かせて、空

高く舞い下がりました。

正太は目を閉じたまま、じっと天狗の背中にしがみついていました。

しばらくして目をあけてみると、ずっと下の方に家や田んぼが見えました。

「うわー、すごいな。まるで鳥になったみたいや。天狗さんは、いつでも空が飛べてええなあ。」

「正太とわしは友達や。いつでも乗せてやるぞ。」

「ええ気持ちやな、まるで夢を見ているようや。」

幾つもの山を越え、幾つもの谷を渡り、ようやく山の裾野に、小さな建物が見えてきました。

「正太、あれと違うか。ちょっと降りてみよう。」

正太と天狗が、養生所らしい建物のそばにある大きな桜の木の下に降りていくと、窓からおっかあの顔が見えてきました。

「あっ、おっかあや！おっかあー。」

おっかあは、突然やって来た正太にびっくりしました。

「正太、こんな遠いとこまでどないして来たんや。」

「あんなぁ、天狗さんに連れてきてもろたんや。」

「えっ、天狗さんに、ほんまに天狗さんに連れてきてもろたんか。」

おっかあには、正太の言っていることが信じられませんでした。

「ほんまやで、そこの桜の木に天狗さんおってやろ」

正太は、天狗さんのことを話そうとして、桜の木を見上げましたが、天狗さんの姿は、どこにも見当たりませんでした。

「天狗さーん、天狗さーん。どこに行ったったんや」

すると、風がどっと吹いてきて、桜の花びらが空に舞い上がりました。

その時、正太は天狗さんが空から見ているような

気がして、空に向かってお礼を言いました。
「天狗さーん、ありがとう。おっかあに会わせてもらってありがとう。」
「本当にありがとうございました。」
と、おっかあもお礼を言いました。
「てんどろ谷の天狗は、怖いと聞いとったけど、やさしい天狗さんやったんやな。」
「そうやでおっかあ、天狗さんはやさしいんやで。」
正太とおっかあは、天狗さんがまだその辺りにいるような気がして、いつまでもいつまでも空を見あげているのでした。
その正太の顔が、おひさまのように、明るく明るく輝いていました。

※ 上三原の岩戸という山のてんどろ谷に、天狗が止まると言われている天狗松がありました。
「天狗ー。」と呼びかけをし、天狗がそれに応答すると、血を吐いて死ぬと言い伝えられています。
この話を、村の古老から聞き、子ども向けにやさしい天狗に変えております。
戦時中、この天狗松は燃料として切り倒され、残った切り株でうすを作り、今も使われています。

三原のお薬師さま

むかし、中三原の西谷へ行く道筋に、阿弥陀さんをおまつりしているお堂がありました。
このお堂は、阿弥陀庵とも呼ばれて、本尊を中心に、観音さまや、薬師如来さまなどが、おまつりされています。境内の東方には寺小屋もありました。
そのお堂より少し離れたところに、おばあさんと、孫の大吉が仲良く暮らしていました。
ある日、おばあさんは、大吉を連れて阿弥陀さんへ、おまいりに行きました。
お堂の中へ入ると、大吉は、おばあさんの横に座りました。
「さあ、大吉やおまえもよう拝むのやで、かしこい子になるようにな。」
「おばあちゃん、ほんまにかしこい子になれるのか。」
「はあ、そうや、『かしこい子になりますように』と拝むんやで。」
大吉は、そんなことを聞くと、嬉しくなって両手を合わせると、一生懸命に拝みました。
「おばあちゃんは、いっつもここへお参りしとってんか。」
「そうやで、毎日、元気に暮らせますように言うてお願いしとるんや。」
「そうか、せやからおばあちゃんは、元気なんやな。」
「そうや。あのな大吉、この一番右側におまつりされているのは、薬師如来さまと言うてな、そりゃ、いぼによう効く仏さまなんやで。」
「ふーん。いぼも取ってくれてのか。」
「ここにあるすべぼうきを持って帰って、毎朝『どうかいぼがとれますように』と、お願いしながら、シュッ　シュッ　シュッと、掃き清めると取れる

んやで。」
「ふーん、不思議やな。」
「死んだったおじいちゃんのおへその回りに、大きないぼができとってな、このすべぼうきで掃き清めていたら、いつの間にかきれいに取れたんや。」
「ほんまに取れたんか。」
「そうやで、そんなありがたい仏さまなんや。」
「へえ・・・そんなにありがたい仏さんか。」
「大吉や、もし、いぼができて困っとっての人がおったったらな、教えてあげたらええ。」
「うん。おばあちゃんわかったで。」
それから大吉は、仲良しの良太ちゃんと惣助ちゃんに、おばあさんから聞いた話をしました。
良太ちゃん、惣助ちゃんも、いぼが取れるのが不思議でたまりません。手習いが終ると、お堂の前で、お参りに来られる人を待ちました。
「ぞうりかくしして遊ぼう。」

ぞうりかくしくねんぼう
床の下のねずみが
ぞうりをくわえて　ちゅっちゅくちゅう
ちゅっちゅく　まんじゅうは　誰がくた
だあれも　くわえん　わしがくた

「あっ、大吉ちゃんの鬼や。」
「うん。どこにかくそう。」
「もういいかい。」
「まーだだよ。」
と遊んでいると、杖をついたおじいさんが、お参りに来られました。
大吉は、何やら嬉しくなって、早速おじいさんに聞いてみました。
「おじいちゃん、いぼはできとらへんか。」
「えっ、なんやへぼか。」
「へぼと違う、いぼやで。」
「ああ、いぼかいな、そんなもんはできとらんぞ。」

と、おじいさんは、にこにこしながら向こうへ行ってしまいました。
「なんやできとへんのか。」
「大吉ちゃん、いぼができて困っとっての人は来てないな。」
次の日も、その次の日も大吉達は、阿弥陀さんのお堂で待っていましたが、いぼができて困っている人は来られませんでした。

山の木の葉もすっかり散ってしまって、木枯らしの吹く頃になりました。
今日は、大吉ひとりで、阿弥陀さんへ出かけて行きました。
お堂の中へ入ろうとすると、西谷の方から、誰かが駆けおりて来る足音が聞こえてきました。
「誰だろう。」
と思って見ると、それは見たこともない人間です。
髪の毛はもじゃもじゃで、頭の真ん中に、角のようなものが生えているのです。大吉は、びっくりして、急いでお堂の中へ隠れました。
すると、その足音は、お堂の前でぴたりと止まりました。
大吉は、恐ろしくなり、息をころしてじっとしていましたが、その人間もお堂の中へ入って来たので、あわてて阿弥陀如来さまの後へ隠れました。
「あっ！誰かいるんか。」
と、声をかけられた大吉は、
「チュウ、チュウチュウ。」
と、ねずみの鳴き真似をしました。
「なんだ、ねずみか。」
そう言うと、その人間は、阿弥陀如来さまに向って何やら言い出しました。
「神さま、いや、違う仏さま、どうかこのおいらの手のいぼを治して下さい。このいぼがあると、『鬼らしくないぞ』と、いつもみんなに笑われています。お願いです。どうしたらええのか教えて下さい。」

大吉は、鬼と聞いて震え出しました。〝やっと、教えてあげられると言うのに〟大吉は、ただ震えるばかりで、困ってしまいました。

すると、あたりがシーンと静かになったので、そうっとのぞいて見ると、鬼の子どものようです。鬼の子が床に両手をついてお願いしているのです。一心にお願いしている様子を見ていると、だんだんに恐ろしさもうすれ、かわいそうになってきました。

「なんとかして、あの手のいぼを治してあげたいな。」

「ああ、どうしょう。」

早く飛び出して行き、教えてあげたいのですが、そんな勇気はありません。

「そうだ!!薬師さまになるといいのだ。」

「薬師さまになったふりをして、鬼の子に、教えてあげよう。」

そこで大吉は、思いきって大きな声をはりあげて言いました。

「おい、そこの鬼の子よ、よーく聞くがよい。」

鬼の子は、「ハッ!」として頭をあげると、あたりをキョロキョロ見回しましたが、そこには仏さまのやさしいお顔があるばかりでした。

すると、また

「鬼の子よ、私は薬師如来じゃ。そこに稲の穂でこしらえたすべぼうきがある。そのほうきを持って帰り、毎朝はき清めると、その手のいぼはきっと取れるぞ。」

鬼の子は、不思議そうな顔をして、すべぼうきを手に取ると、

「薬師如来さま、これをしばらくお借りいたします。きっと返しに来ますから。」

そう言うと、しっかりとすべぼうきを持って、急いで西谷の山の方へ帰って行きました。

「ああ、恐かった。見つかるかと思うた。」

「それにしても、なんだか胸の中がすうっとしてええ気持ちや。」

大吉は、もう嬉しくてうれしくてたまりませんでした。

家に帰ると、早速おばあさんに、鬼の子のことを話しました。

おばあさんは、

「それはええことをしたな。」

そう言って大吉の頭をやさしくなでてくださいました。

それから、しばらくたった朝のことです。

大吉は、早く目が覚めました。いつもより外が明るいので、障子を開けてびっくりしました。

「あっ、雪だ。雪が降っとる。」

「わーい、わーい。嬉しいな。」

大吉は、急いで着替えると、飛び出して行きました。

「わーい。ようけ降っとる。」

雪やこんこ　あられやこんこ

歌いながら、まだ誰も歩いていない雪の道を、ザク、ザク、ザクと歩いて行きました。

阿弥陀さんまで来ると、西谷の方から大きな足跡が続いているのです。

〝おや、誰かおらより先にお参りに来た人があるんやな〟

と思って、お堂の中へ入って見ると、誰も見当たりません。薬師如来さまのところに、きれいな花が、そなえてあるのが目にとまりました。そして、紙切れと、新しいすべぼうきが置いてありました。

おかげさまで　手のいぼは

とれました。ありがとう。

おにのこ

と、書いてありました。

「わーい、鬼の子のいぼが取れたんや、よかった、

よかったな。おばあちゃんが言うたった通りや、ほんまに薬師さまのすべぼうきは、よう効くんやな。」

「お薬師さま、ありがとうございました。」

大吉は、自分のことのように喜んで、何度もお礼を言いました。

やがて、東の空からお日様が、ゆっくりと、顔を出されました。

まっ白な雪は、お日様の光に照らされ、きらきらきらきらと、輝いていました。

このお薬師さまは、いぼとりとして、ごりやくがあると言うことで、今でも、お花や、新しいすべぼうきがそなえてあります。

※ 中三原に、古くから阿弥陀さんといって、村の人達に親しまれてきたお堂があります。

正面に阿弥陀如来（本尊）、脇士に観音、勢至の両菩薩、更に、両方に増上天、広目天、右側に薬師如来さまがおまつりされています。

このお薬師さまは、いぼとりのご利益があるということで、新しいすべぼうきが沢山そなえてあると、古老の方から聞き、おはなしにしました。

今は、十数人の大師講の老人の方が、毎月一回集まられ、供養と共に、食事をしたり御詠歌を上げて、楽しい一日を過されています。

トントン山道

春には、桜がいっぱい咲き、秋には、紅葉で真っ赤になる、竹谷山という山がありました。その山の間には、大きな岩や、小さな岩がいくつもあって、きれいな水がさらさらと流れ、たくさんの滝ができています。その山のふもとに、俵田という村がありました。

仙太のおじいさんは、今日も縁側で、煙草を吸っておりました。

「なあなあ　おじいちゃんお話して。」

「早ようして。」

と、友達の真吉と、お花も催促しました。

「さて、どんな話をしてやろうか。」

おじいさんは、煙草の灰をポンポンと落としました。

「せやのう、宝の話でもしてやろうか。むかし、むかしの話じゃが、この前の岩山の上に、野間城というお城があったんじゃ。それが、ここから十里余り離れた三木という城から、別所の大軍が攻めてきて、激しい戦いの末、とうとうお城が焼けてしもうたんや。」

「ええっ、お城が焼けてしもうたんか。」

「そうや。その時に、家来が大事な三つの宝を持って逃げたそうで、その一つの『金の玉』が、竹谷山に埋ずめられていると言われとるんじゃ。」

「へえ、竹谷山のどこにや。」

「それはな、山道にや。なんでも井戸みたいな深い穴を掘って、大きな石で蓋がしてあるということや。その上を歩くとな、トントンと音がするそうじゃ。」

「ふうん、トントンと音がするんか。」

「そうや。」
「今でもあるんか。」
「そらあるんや。」
「見つけたったんか。」
「さあな、探しに行った人は大勢あったが、見つけたという話は、聞いたことがないのう。なんでも、あんまり大きい岩なんでな、どうしても掘ることができなんだそうじゃ。」
おじいさんは、そこで話を止め、まず一服と煙草に火をつけました。
そこで、仙太が聞きました。
「おじいちゃん、話はそれでおしまいか。」
「そうじゃ、これでおしまいじゃ。」
仙太、真吉、お花は、おじいさんの話を聞くと、もう宝捜しに行きたくてたまりません。
「なあ、今から宝捜しに行こう。」
「うん、行こう　行こう。」
いつもみんなを引っぱっていく仙太が先頭です。

山道には、野菊や、萩の花が咲きこぼれ、大きな木、小さな木の枝が張り、風がその枝を鳴らしていました。落ち葉がカサッカサッと足元で音を立てています。
少し登ると、大きな岩や小さな岩がいくつも見えてきました。
「ええか、ここから岩登りや。」
と、仙太が力をこめて言いました。
「うん。せやけど大きい岩ばっかりやな。」
「お花ちゃん、登れるか。」
「うん、がんばるわ。」
「このずうっと上の滝のところまでやで。」
三人は、ゆっくり　ゆっくり足を踏み締めるように、上へ上へと登って行きました。少し行ったところで、お花ちゃんが、岩の上に座わり込んでしまいました。
「お花ちゃん、がんばれ。」
「お花ちゃん、もうちょっとやで。」

「もうあかん、しんどいわ。こんな大きい岩登られへん。」
「しゃあないな。ほな二人で引っぱったるわ。」
「よいしょ、よいしょ。」
「よいしょ、よいしょ。」
やっとのことで三人は、不動の滝の所まで登ってきました。一生けん命登ってきたので、もう汗びっしょりです。
「あー　のどがからからや。」
「わあ　きれいな水や。」
「早よう飲もう。」
ゴクゴクゴクゴク
「あー　冷た。」
ゴクゴクゴクゴク
「あー　おいし。」
ゴクゴクゴクゴク
滝を流れる水しぶきが顔にかかって、とってもいい気持ちです。

岩の上でひと休みをした三人は、また山道を登りはじめました。まわりの木が、だんだんと大きくなり、道も狭くなって、なんだか薄暗くなってきました。
「仙太ちゃん、宝物あるとこまだか。」
「仙太ちゃん、ほんまに大丈夫か。」
「大丈夫や、おらについてき。」
仙太は、胸をポーンとたたいて、いばって歩きはじめました。
その時です。
カサカサ　カサカサ
「きゃあ　恐い。」
「仙太ちゃん、何んかおるで。」
「何言うとんねん、何んにもおれへん。」
カサカサ　カサカサ
「仙太ちゃん、また音したで。」
「ほんまや、なあもう帰ろうな。」

「大丈夫、大丈夫。」
仙太も本当は恐かったのです。でも恐いのを我慢して、そうっと辺りを見回しました。
「なあんや、りすやないか。見てん、あの木の枝におるやろ。」
真吉とお花は、ホッとしました。
「せやけど　やっぱり恐いな。」
「うん、気持ち悪いな。」
「もうちょっとがんばろう。」
こんな話をしながら登っていくと、小さな橋がありました。橋を渡ると、今まで狭かった道が急に広くなっています。
「ここちがうやろか。」
「そうかもしれへんな。」
「うん、歩いたらトントン音がするいよったったなあ。」
三人は、蛙みたいにピョンピョンと跳ねまわり、音のする所を捜しはじめました。

すると、不思議なことに、本当にトントンと音がする所があるのです。
「わあ、ここトントン音がしょる。」
「ここもや　ここもや、トントン太鼓みたいや。」
「こっちもやで、トントントン不思議やなあ。」
三人は、それはもう嬉しくて、にぎやかに跳ね回りました。
「さあ、宝捜しや。」
「おー！」

よいしょ　こらしょ　ピカピカ宝
よいしょ　こらしょ　早く出てこい
よいしょ　こらしょ　がんばれ　がんばれ

「あれえ、これ何やろ。」
「あった　あった。仙太ちゃん　これか。」
「そんなん違う　違う、光ってへんやろ。」
「あっ、あった　あった、仙太ちゃん　これは。」

「違う　違う。」

よいしょ　こらしょ
よいしょ　こらしょ

「なかなか見つかれへんなあ。」
「ほんまやなあ。もっと掘らなあかんねんで。」

よいしょ　こらしょ
よいしょ　こらしょ

「ああ　しんど、仙太ちゃん　なんぼ掘っても石ばっかりや。」
「ほんまや、石でガラガラや。」
「もうやめた。」
「せやけど見てん、下の方は、大きい石みたいやで。」
「ほんまにこれは、大きな一枚岩の蓋やろか。重たいのになあ。」
「昔の人は、えらい力持ちやったんやな。」
掘っても掘っても石ばかりで、宝物は見つかりませんでした。
すっかり疲れてしまった三人は、掘るのを止めて、いっぱい積っている落ち葉の上に、寝ころがりました。なんと心地よいことでしょう。木々の間をぬって、夕やけ雲が顔をのぞかせています。
「わあ、きれいな夕やけや。」
「ほんまや、明日もきっとええ天気やで。」
「宝物見つかれへんかったけど、おもしろかったなあ。」
「うん、おもしろかったなあ。また、こうな。」
「うん。」
三人は、山道を駆け下りようとしましたが、あんまり急な道なので、仙太がお尻をついて下りはじめました。

ズルズルズルズル

「おーい、真吉ちゃん、お花ちゃん、早よう滑ってき、おもしろいで。」
「うん、行くで。それ。」

ズルズルズルズル

「わあーい　わあーい。」

「ああ　ええ気持ちやった。」
「せやけど、ちょっと恐かったな。」
「あれっ、仙太ちゃんのお尻穴があいとるわ。」
「あっ、ほんまや。よう滑ったもんな。」
三人は、お尻をパンパンと払いながら、山を下りて行きました。

夕やけこやけで　日が暮れて
山のお寺の鐘が鳴る
おててつないで　みな帰ろ
からすと一緒に帰りましょ

もうすっかりお日様は、山の向こうへ沈み、家々の煙突から、モクモクと白い煙が上がりはじめていました。

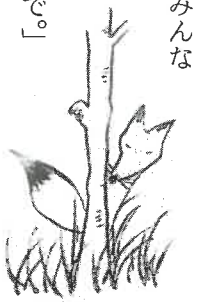
その夜、三人は、きっと夢の中で、宝物を見つけていることでしょう。

※ 野間山城は、三木市の別所氏に滅ぼされるまで二百十三年間続き、お姫さまが興入れのとき持ってこられた数々の品物を、お城の宝物として蔵を建て、守護役人をつけました。この宝物蔵は、野間山城の落城のとき兵火に焼かれましたが、大切な品物は守護役の家来が、ひそかに他に移して難をまぬがれたそうです。―　郷土の城ものがたり　より　―
古老の話によると、宝物の一つ『金の玉』が、竹谷山の山道に埋めてあり、その上を歩くとトントンと音がしたということです。

コン太と数珠くり

大きな岩や小さな岩が、ゴロゴロころがっているお山がありました。
そのお山のずうっと上の方に、お母さんぎつねと子ぎつねのコン太が住んでいました。下を見下ろすと、下野間のお薬師さんが見えました。今日も、お薬師さんの方からにぎやかな声が聞こえてきました。
子ぎつねのコン太は、村へ降りて行くのが大好きでした。
コン太が、木の陰からそうっと見ると、村の子どもたちが、すもうをとって遊んでいました。
「おもしろそうやな。おらもすもうをとってみたいなあ。」
コン太は、すもうがしたくてしかたがありません。

よく見ると、いつもみんなと一緒に遊んでいる新吉ちゃんがいません。
「そうや、新吉ちゃんに化けて、寄せてもらおうっと。」
化けるのが得意なコン太は、
「ココーン、コンコン。新吉ちゃんになあーれ。エイ！」
と言うと、あっという間に新吉ちゃんに早変わり。
「おしっぽがでてへんかな、よう忘れるんや。うんうまく化けられたぞ。」
コン太は、いそいそと、みんなの所へ駆けて行きました。
「すもうごっこ寄せてえな。」
「あっ新吉ちゃんか、ええで。」
「ひがーし源太山、にーし新吉川。」
「どっこいしょ、どっこいしょ。」
ふたりは、足に力を入れてしこを踏みました。
「はっけよいのこった。」



コン太は、力いっぱいぶつかっていきました。
「のこった、のこったのこった。」
「源太ちゃん、がんばれ。」
「新吉ちゃん、負けるな。」
コン太は、顔を真っ赤にして踏ん張りました。しかし、村の子どもの中でも、一番体が大きくて力の強い源太ちゃんにはかないません。
あっという間に、
〝すってん　ころりん〟
と、投げ飛ばされてしまいました。
「あいたたた・・・」
コン太のおしりはまっかっか。もう少しで、きつねの姿に戻ってしまうところでした。
「大丈夫か？」
「けがしなかったか。」
源太ちゃんに次郎ちゃん、みよちゃんも駆け寄ってきました。
「うん、大丈夫や。おおきに。」

コン太は、みんなが心配してくれるので、とっても嬉しくていい気持ちになりました。
やがて、西の山にお日さまが沈むと、
「もう　そろそろ帰ろか。」
「そうやな。お母ちゃんが心配してやな。」
「帰ろう帰ろう。」
「あれ、新吉ちゃんどないしたん？帰らへんのか。」
「う、うーん。おら、もうちょっとしてから帰るわ。」
「そうか。ほな気つけて帰りよ。」
「さいなら。」
「さいなら。」

夕やけこやけで日がくれて
山のおてらのかねがなる・・・

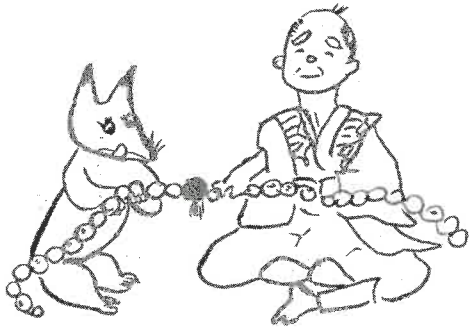
みんなの後ろ姿が見えなくなるまで見送っていましたが、やがて、一人になるとお薬師さんのお堂の方を向いて、

「今日は、みんなと遊べて楽しかったです。せやけどこの痛いおしり、はよう治りますように。」
と拝み、とっとことっとこと、山へ帰って行きました。
山では、お母さんぎつねが、コン太の帰りをいまか、いまかと待っていました。
「お母ちゃん、ただいま。」
「あっ　コン太、おかえり。」
ふと見ると、お母さんのひざ小僧から血がにじんでいました。
「お母ちゃん、足から血がでとるで。」
「大丈夫や。おまえの帰りが遅いんでな、迎えに行きよってころんでしもたんや。」
「ほんま、心配かけてごめんな。」
「ええのやで。」
「そうや、この葉っぱをつけたらええ。」
それは、コン太がおしりにつけようと思い持って帰ってきた葉っぱでした。
「この葉っぱをか？」

「うん、これ　よもぎと言うてな、もんで傷口に付けたらよう効くんやで。この前に村へ行った時、みよちゃんのおばあちゃんが言よったのを聞いたんやで。」
コン太は、お母さんの足に、よもぎの葉っぱを揉んでつけてあげました。
「コン太、おおきに。」
お母さんは、コン太の頭を優しくなでてくださいました。
コン太は、今日すもうをとっておもしろかった事を話しました。お母さんは、にこにこしながら聞いてくださいました。

夏のある日、カーンカーンと鐘の音が、お薬師さんの方から聞こえてきました。
コン太は、不思議に思いお薬師さんまでやってきました。
お堂の中をそうっと覗いて見ると、村の人達が丸

くなって座り、沢山の玉をつないだ大きな輪のようなものをグルグル回しながら、
「なむあみだぶつ　なむあみだぶつ。」
と、拝んでおられました。
棚の上には、おだんごが山のようにお供えしてありました。
「おいしそうなおだんごやな。一つ食べてみたいなあ。」
コン太のおなかが、ぐうーっとなりました。
「あそこに、新吉ちゃんのおじいちゃんがおってや・・・・、そうや、新吉ちゃんに化けて、おだんごを食べさせてもらおう。ほんまは人をだましたらあかんけど、おだんごなんて食べたことないもん。お薬師



さん、かんにんな。」
そう言うと、
「コーンコン、エイッ！」
と、新吉ちゃんに化けてお堂の中へ入っていきました。
「おじいちゃん。」
「うむ。新吉か、こっちへおいで。」
「おじいちゃん、みんなで何しよっての？」
「これか、これはな『数珠くり』というんや。数珠を回して仏様を供養し、病気にならんようにいうて拝んどるんやで。」
「ふうん、『数珠くり』言うのんしよってんか。」
コン太は、こんなもの見たことがありませんでした。
「この玉はな、百八つあって、一つ一つが仏様なんや。一番大きい玉が、自分の所へ回ってきたら頭を下げて拝むんやで。」
「あのふさふさのついた大きな玉やな。」

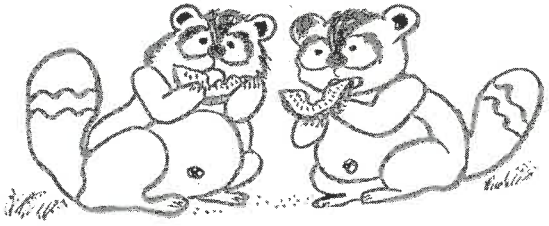
「そうや、百ぺん回ってくるまで拝むんや。」
「えらいじょうさんやな。」
「新吉、おまえもやってみるか。」
コン太は、おもしろそうやなと、思いました。
「おじいちゃん、おらも風邪ひかんように拝むわ。」
早速、おじいちゃんの真似をして、数珠をさわってみました。玉が、コン太の手の上をコロコロと通っていきます。
「なむあみだぶつ・・・・・。」
「あっ、きたきた。大きな玉がきたぞ。」
コン太は慌てて、
「お母ちゃんが病気になりませんように。」
「風邪をひきませんように、アン。」
小さな声で急いで拝みました。うまく言えたので思わず、
「はあー。」
と、溜め息がでました。
すると、今度はお供えしてあるおだんごが気になりだしました。
「なんまいだぶつ　おいしいだんごコンコンコン。」
「なんまいだぶつ　あまいだんごコーンコン。」
「なんまいだぶつ　たべたいだんごコンコンコーン。」
おじいちゃんは、新吉があんまりコンコン言うので心配して、
「新吉、コンコンいうて、風邪でもひいたんか。」
「えっ、ちがう　ちがう。」
コン太は、おじいちゃんにそう言われてびっくりしました。つい調子に乗りすぎて、新吉ちゃんに化けていたのをすっかり忘れていたのです。
「そうか、そんならよかった。もう数珠くりは終わったから、おだんごをおたべ。」
そう言って、おじいちゃんは、コン太の手にいっぱいおだんごをのせて下さいました。コン太は、嬉しくて、大きな声で、
「おじいちゃん、おおきに。」
と、お礼を言うと、おだんごを落とさないようにし

っかり持って、外へ出ました。
もう日はすっかりと暮れて、空にはまんまるいお月さまが、にこにこわらっておられました。
きつねの姿に戻ったコン太は、
「数珠くりっておもしろかったな。お母ちゃんもおらも、病気せんように拝んだし、おだんごいっぱいもらったし、はよ帰ってお母ちゃんにもわけてあげよう。」
にっこり微笑み、お母さんの待っているお山へとっとことっとこ走って帰りました。
ふさふさしたしっぽを振りながら、嬉しそうに帰っていくコン太の後ろ姿を、おじいちゃんが、にこにこしながら見つめておられました。

※昔、はやり病で病人が多くでたが、医者もなく、仏を拝むことで病から逃れようとされたとのことです。
今でも、毎年八月十四日に数珠くりが行なわれている。

浄善さま

むかし　むかし、大屋の奥に、浄善法師という偉いお坊さまが住んでおられました。このお坊さまはやさしくて、困っている人があれば話を聞いてあげ、病気の人には薬をあげたりして、村の人びとからとても慕われていました。
大屋の山には、たくさんの狸が住んでいて、里へおりてきては、畑の芋や人参を食べあらし、夜になると、にぎやかに腹づつみを打って、大きな声で騒ぎまわり、毎日いたずらばかりしていました。
カンカン照りのある日、狸の大将が言いました。
「源やんの畑のすいかがおいしい頃や。それをもらいに行こうやないか。」
「わあい。行こう、行こう。」
狸は、列を作って源やんの畑へ行きました。
「ようけでけとるなぁ。」
「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……いっぱいで数えられへんわ。」
「それより早よ食べよう。」
「そんなら源やん、もらうで。」
「いただきまあす。がぶ　がぶ　がぶ、がぶ　がぶ　がぶ。おいしいなあ、赤こうて、甘うて、水けが多うて。」
狸達は、大きなすいかから、次つぎと食べていきました。
「やっぱり源やんは、すいかを作るのがうまいな。」
「ほんまに、すいか作りの名人や。おいしいわ。」
食いしんぼうなぽん助は、手当たりしだいにすいかを食べて、大きなおなかがはちきれそうになりました。すいかをいっぱい食べた狸は、山へ帰って行



きました。

夜になって、まあるいお月様が、山の上にぽっかりと顔を出されると、みんな広場に集まってきて、腹づつみを打って踊りだしました。

ポンポコ　ポンポコ　ポンポコポン
ポンポコ　ポンポコ　ポンポコポン

「今日は、おいしいすいかを食べたんで、特別ええ音が出るわい。」

おじいさん狸は、得意になっておなかをたたきました。みんなもうかれて、ポンポコ　ポンポコたたきながら、大きな声で歌いました。

しょう　しょう　しょうじょう寺
しょうじょう寺の庭は
つ　つ　月夜だ
みんな出て　こいこいこい
おいらの友達や
ポンポコポンノ　ポン

みんなが楽しそうに、歌ったり踊ったりしているのに、ぽん助の姿がみあたりません。

「ぽん助が来とらへんな。」

「どないしたんやろ。ちょっと、行ってみようか。」

狸達は、ぽん助の家へ行ってみました。

「痛いよう。痛いよう。」

食いしんぼうなぽん助が、おなかを押さえて苦しんでいました。

「おい、ぽん助。どないしたんや。」

「痛い、痛い。おへその横が痛いよう。」

狸達は、ぽん助の大きなおなかを見ました。おへその横が少し赤くなっていて、ぽん助が泣くたびに、赤くなった所が大きくなったり、小さくなったりしていました。

「これは、悪い虫にかまれたんとちがうやろか。」

「いやいや、すいかを食べすぎて、おなかの皮が薄うなったんやで。」

狸の大将が、ぽん助のおなかをそうっとなでながら、ようく見ました。

「これは、先が赤こうなっとるからモノや。できものができたのや。」

「どないしたらええやろ。困ったなあ。」

「人間が、ようドクダミの葉っぱを取っておったが、あれをはってみたらどうやろう。」

さっそく狸達は、ドクダミの葉をはったり、汁を飲ませたりしましたが、痛みは止まりませんでした。ぽん助のおへその横のできものは、少しずつ大きく腫れてきて、とうとう歩けなくなり、毎日泣いていました。

「ぽん助、かわいそうになあ。何かよう効く薬はないやろか。」

みんなは、ぽん助を囲んで考え込みました。

「そうや、この山の下の村に、できものや、病気を治して下さる浄善法師というお坊さんがおられると聞いたことがある。」

と、おじいさん狸が言いました。

「その人は人間やけど、きっとやさしい人にちがいない。こうなったら、みんなでぽん助を連れて、お頼みに行こうやないか。」

「じいさん、そんなとこへ行ったら、つかまえられるのとちがうか。」

と、若い狸が心配そうに言いました。

「いや、みんなを助けてくれての人やから、そんなことはないやろ。」

「そうやなあ。あんなに泣いているぽん助がかわいそうや。もし、おなかが治らなんだら、ぽん助死んでしまうかもわからへんなあ。」

「みんな、どないや。ぽん助の為に、一緒にお頼みにいこうやないか。」

と、おじいさん狸が言いました。

「それがええ、みんなで行ってみよう。」

狸達は、手をたたいて言いました。

若い狸が、痛がって泣いているぽん助を背おって、山をおり谷川を渡り、あぜ道を通って、浄善法師さまの所へ連れて行きました。ちょうど浄善法師さま

は、縁側に腰をかけて、源やんと話をしておられました。

「あっ、源やんや、怒っとってやろな。困ったなあ。」

「捕まえられるのとちがうやろか。」

「どないしょ、逃げよか。」

「逃げるいうても、ぽん助をおんぶしとるしなあ。」

「しょうがない。みんなで謝まろう。」

と、狸の大将が言いました。

狸達は、そろり、そろりと源やんの前へ行きました。

「源やん、このあいだは、すいかを黙って食べてすんませんでした。これからは、いたずらをせえへんから、どないぞこらえてください。」

と、みんなで一生懸命に謝りました。

浄善法師さまは、それを見てにっこりして言われました。

「狸達よ、人の物を黙って取ることは悪い事じゃ。これからは、決してそんなことをしてはいかんぞ。」

「はい、もう人の物を黙って取ったりいたしません。」

「どうぞ、おゆるしください。」

浄善法師さまは、やさしくぽん助のおなかをなでながら、ありがたいお経を唱えて、できものに薬を塗ってくださいました。すると、おなかの痛みはやわらいできました。

狸達は、毎日ぽん助を浄善法師さまの所へ連れて行き、薬を塗ってもらいました。

何日か過ぎると、ぽん助は歩けるようになりました。

「ぽん助、よかったなあ。」

「みんなのお陰や。ありがとう、ありがとう。」

ぽん助の目から涙が流れました。

柿の実がおいしくなった頃、ぽん助のおなかはきれいに治って、元気にはらづつみが打てるようになりました。

狸達は、柿や栗の実をたくさん持って、お礼に行きました。

「浄善さま、ありがとうございました。お陰できれいに治りました。」

と、ぽん助がうれしそうに笑って言いました。狸達も、みんなで声を揃えてお礼を言いました。

「いやいや、みんなが仲間の命を救おうとしたからじゃ。これからもみんな仲ように、助け合うのだぞ。」

と、浄善法師さまが、やさしくおっしゃいました。

狸達は、ぽん助を真ん中にして、手を振りながらよろこんで山へ帰って行きました。

法師さまが亡くなられると、村の人びとが、法師様をていねいにおまつりしました。そのお堂の前の線香の灰がまた、できものによく効くといわれて、遠くからも大勢の人がお参りに来られました。治してもらった人はお礼に、小さな旗をもってお参りしました。

いまでも、お堂の前には、小さな白い旗がそよそよと風にゆられています。

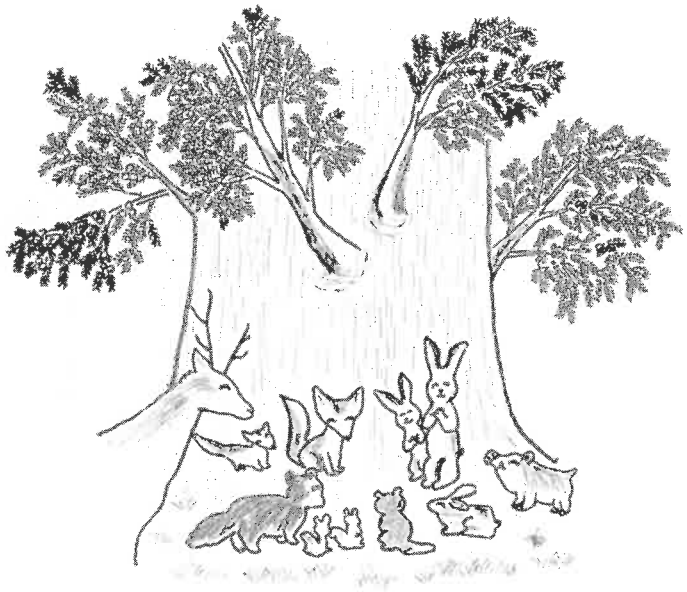
※ 浄善法師は、竹田城から大屋へ移住し、人の道を説く一方、病気の者には薬を与えたため、その徳を慕って遠くから教えをこう者が絶えなかったという。

法師の死後、墓前の線香の灰がはれものに効くといわれ、治った人はお礼参りの時に、小さな紙ののぼりを立てる習慣があった。— 古老の話 より —

大杉の神様

山と山との谷間に、のどかな大和村がありました。
ずーっと北の方には、笠形山がそびえていました。
むかし　むかし　その笠形山から杉の実が、大風でとばされて、大和村杉ケ谷に落ちてきました。
杉が谷に落ちた杉の実は、ぐんぐん　ぐんぐん伸びて、羽根を広げたように枝をのばし、大きな大きな杉の木になりました。その杉の木は、いつの頃からか、『大杉』とよばれるようになりました。

杉が谷には、きつねやたぬき、いのししやうさぎなど、たくさんの動物達が住んでいました。
動物達は、大杉の下でかくれんぼや、おにごっこをしたり、落ちている杉の実で首飾りを作って遊びました。木の陰でお昼寝もしました。
みんなこの大杉が大好きでした。



今日もこん吉は、みんなと遊ぼうと大杉に行きました。
うさぎ達は、杉の実を拾って遊んでいました。こん吉も探しましたが、もうひとつも落ちていませんでした。
こん吉は大杉を見上げました。
すぐそこの枝に、杉の実がまだ沢山ついています。
「かあちゃん、あの杉の実とってえな。」
「こん吉、また明日になったら、落ちてくるからな。明日ようけ拾うたらええのや。」
「あかんのやー、今ほしいのや。今や、今や。」
こん吉があんまりうるさく言うので、母さんぎつねは、ひょいと跳び上がり枝に手をかけました。
その拍子に杉の枝がポキッと折れて、母さんぎつねは倒れてしまいました。
「かあちゃん、どないしたんや。」
びっくりしてこん吉がゆすっても、動きません。

こん吉のお母さんは、大杉の枝を折ってしまったためか、その日から起きることが出来なくなり、寝込んでしまいました。
〝おいらが、わがまま言うたから、かあちゃんがこんなことになってしもて……。かあちゃんごめんな。こんどからはわがまま言わへんから、早う治ってえな〟
こん吉は、母さんぎつねの枕元にすわってあやまりました。
「かあちゃん、しんどいのか？　頭痛いのか？」
こん吉は、頭を水で冷やしたり、手や足をなでたりしましたが、母さんぎつねは、寝たままでした。
こん吉は、林の向こうにたくさん咲いていたげんのしょうこを思い出しました。
「そうや、かあちゃんが、この草はよう効く薬の草やと、言よったたなあ。あれが効くかもわかれへん。」
こん吉は、急いでげんのしょうこを採ってきて、

その汁を母さんぎつねに飲ませました。
でも、母さんぎつねは、少しもよくなりませんでした。
「困ったなあ、どないしたら、元気になってやろ。」
こん吉は、しょんぼりとして、山を下りて行きました。
木々の間を通り抜けていくと、緑のはっぱでいっぱいの芋畑が見えてきました。
〝わぁ、大きな芋畑や。そうや、お芋を食べたら、かあちゃんの病気もなおるかもわかれへん、ちょっとだけもらおう〟
こん吉は、芋畑までとんでいきました。
「かあちゃんの分だけもらいます。」
と言うと、おいしそうな芋をひとつ掘って急いで帰って行きました。
「かあちゃん、この芋を食べたら元気になれるで。」
こん吉は、自分が食べたいのをがまんして、母さんぎつねの口元へもっていきました。

「こん吉、おおきに。おいしいわ。なんや元気がでてきたみたいや。」
しかし、お母さんぎつねはやっぱり起き上ることができませんでした。こん吉はがっかりして、どないしたら元気になってやろうかと考えながら、とぼとぼとまた山を下りていきました。
すると、村のほうから、子ども達がまりをついて遊んでいる歌声が、聞こえてきました。

ひーとつ　おおすぎ　神さんは
ふーたつ　やさしい　神さんじゃ
みーつ　おおすぎ　神さんの
よーつ　木の枝　折るじゃない
いーつつ　病気に　なりまする
むーつ　おおすぎ　神さんは
なーなつ　おいなり　大好きじゃ
やーつ　おいなり　お供えすればよい
ここのつ　病気も　なおります

とおーで　よいよい　なーおった

〝あの大杉は、神さんの木やったんか。かあちゃんが知らんと枝をおったから、神さんが怒ったったんやろか。早う神さんにあやまらなあかん〟
こん吉は、急いで村のあげ屋に行ってあげを一枚もらうと、大きなやつでの葉っぱにのせて、大杉の木の下におきました。
「大杉の神さん、ごめんな。おらがわがまま言うたんで、かあちゃんが枝を折ってしまいました。今度からはよう気をつけるさかい、ごめんな。かあちゃんが早う起きられますようにして下さい。」
こん吉は、小さい手を合わせて一生懸命におねがいしました。
そのとき、大杉の枝が「よしよし」というように、大きくゆれ動いたように見えました。
こん吉がとんで帰ってみると母さんぎつねが、にこにこしながら待っていました。
「かあちゃん、ただいま。あっ、もう起きてもええんか。」
「こん吉、おかえり。心配かけたなぁ。かあちゃんは、もう元気になったで。」
母さんぎつねは、こん吉を強く、強く抱きしめました。
〝かあちゃん、ごめんな〟
こん吉は、暖かな胸の中でそっとつぶやきました。

※中三原の杉ケ谷中腹に、大きな杉の木があり、笠形山から飛んで来た実が根を生やした。と言われています。今では枯死状態になっていますが、明治時代にこの大杉の枯れ枝を、薪にと持ち帰りかまどに入れると、急に目が見えなくなり意識もなくなったという不思議な出来事が起こりました。あわてて、

祈禱師を呼び祈禱してもらったところ、すぐに目も意識も元に戻りました。枯れ枝を持ち帰った人は、大杉には神様がおられるのだと驚き、枯れ枝を元の場所に納めたということです。これを納めたのが、五月十六日だったことから、この日が大杉の神様を祭る日となりました。

「ふるさとみはらの生活誌」より

きつねがえり

「きーつねがえり　おろろやころろ　おおさむ。」

太一は、くるくるとえり巻きをすると、隣の金ちゃんを誘いに外に飛び出しました。

朝からビュービューと北風が吹き、ピシピシと鳴っていた竹の音もいつの間にか鳴りやみ、ちらちらと雪が散らついてきました。

外はもう薄暗く、家々には明かりがともり始めています。

「おうい、金ちゃん、きつねがえりに行こうか。」

「ああ行こう。今日は寒いなぁ。」

「今夜は、雪が積るかも知れんな。」

二人が寺の坂道をのぼって行くと、村の子どもたちが集まっていました。

「みんな揃うたか。」

「ほな廻ろか。」

夕やみの中を子どもたちは、

「やまのーくち　やまのーくち」

と、言いながら家を一軒一軒廻って行きました。

「寒いのにご苦労はん。」

「気ぃつけて廻りや。」

村の人たちは、そう言ってお金を渡して下さいました。

松の内も明けようとする一月十四日に、中野間の川西という村では、こうして、村の人からお金をもらった子どもたちが、極楽寺に集まってくるならわしがあります。

お寺では、和尚さんが、竹の先に御幣ときつねの好きな油あげを付けておられました。

「和尚さん、今晩は。」

「おお、みんなご苦労はんやな。」

お寺に集まった子どもたちは、火鉢を囲んで夜の更けるのを待ちました。
「おい、みんなぼつぼつ外へ出よか。」
「外は、寒いやろなぁ。」
「寒いけどがんばるぞ。」
と、言いながらみんなは外へ出ました。
お寺の庭のさざんかの花が、ほんのり白く浮かんで見えます。
「みんな大きな声を出すんやで。きつねがびっくりするような声でな。」
「それ、一、二の三。」
「魔おどーし　魔おどーし　魔おどーし。」
と、山に向かって叫びました。
子どもたちの声が、〝魔おどーし　魔おどーし　魔おどーし〟と暗い山々に響きわたりました。
「おおさむ、早う中へ入ろう。」
子どもたちは、急いでお寺の中へ入りました。
「寒かったやろ、早うあずきのおかゆをお食べ。」

お寺の奥さんが、おかゆを出して下さいました。
「いただきます。ほっかほかのおかゆや。」
「あぁ、おいしい。」
「ようぬくもるなぁ。」
「和尚さん、おおきに。」
「おばちゃん、おおきに。」
と、口々にお礼を言いました。
体も暖まり、おなかもいっぱいになると、
「和尚さん、何できつねがえりするんや。」
と、新入りの友吉が尋ねました。
「それはな、昔、この辺は山と山に囲まれた寂しい所やったんや。このしもの花の宮と、かみの俵田との境もな、大きな木が生い茂り、昼間でも薄暗いところでな。昔の人は、ようきつねにだまされよったんや。」
「そんなにきつねがおったんか。」
「きつねにだまされた話がようけある。ひとつだけその話をしようかな。」

「きつねにだまされた話か、おもしろそうやな。」
と、みんなはひざをのり出してきました。
「この寺の裏山にきつねの親子が住んでおってな。」
和尚さんの目が微笑んでいます。

「かあちゃん、おなかがすいたよ、コーン。」
「よしよし、もう少しお待ち。何か食べ物がないか捜してくるから、どこにも行かずに待っているんだよ。」
母さんぎつねは、こわごわふもとの村まで下りて来ました。
「何か食べ物はないかなぁ。」
と、辺りをキョロキョロしていると、向こうから風呂敷包みを背負った平じいさんが歩いて来ました。

「コーン、いいにおいがするぞ、こりゃぁしめた。あれをいただくことにしよう。坊やも喜ぶやろ。」
と言いながら葉っぱを頭の上にのせて、
「きれいな娘さんになぁれ、チチンプイプイのプイ。」
と言って、誰が見てもびっくりするぐらいきれいな娘に化けました。
きつねとは、ちっとも知らぬ平じいさんは、
「ちょっと、そこの娘さん、どこへ行かれるのかな。」
「はっ、うちのことか。」
「そうや。」
「ちょっとそこまでもち粉を買いに。」
「ほんならそこまで一緒に行きまほか。」
平じいさんと娘は、楽しく話をしながら歩いて行きました。
村では、日が暮れてもなかなか帰って来ない平じいさんを心配して、人々は手に手にちょうちんを持って、捜しに行きました。
「平じいさんどこへ行ったったんやろ。」

「道に迷うとってんと違うやろか。」
「平じいさーん、平じいさーん。」
と、山の中ほどまで来た時、平じいさんの歌声が聞えてきました。

エッサ　エッサ　エッサホイサッサ
おさるのかごやだ　ホイサッサ

「あっ、平じいさんや。」
「あんなとこで踊っとってや。」
平じいさんは、木の葉をひょいと頭にかぶり両手をかざして、調子よく踊っているではありませんか。
「平じいさん、いったいどないしなさったんや。」
「しっかりせなあかんで。」
「ここは山の中やで。」
「えっ、ほんまかいな。あれぇ、わしの荷物がない。巻きずしに、きつねずし、ばあさんに食べさせたろう思うてな、土産にもろうて来たんやがな。」
「それそれそこにあるがな、その木の根っこに。」
「ああよかった。それにしてもみんなすまんかったなぁ。」
「ええがなええがな、無事でよかった。」
「平じいさん、ほな帰るとしようか。」
平じいさんが、風呂敷包みを背に、
「どっこいしょ。」
と立とうとしましたが、ヒョロヒョロとして荷物が重くて立てません。
「どないしたんやろ。」
風呂敷包みを開けてみると、
「ありゃりゃぁ、石ころばっかりやぁ。」
「こりゃ、きつねにだまされたんやな。」
と、いう話や。
「あっはははは。」
「あっはははは。」
「母さんぎつねが、そっくり持って帰って子ぎつね

に食べさせたんやろな。」
「平じいさんばかりやない、こんなことがようあったもんや。それでな、この寒い食べ物のない時に、きつねに油あげを与えて、人々がだまされんようにと、昔の人は考えてこんなことをするようになったんや。」
和尚さんの話を聞いている内に、夜もだんだん深まってきました。
「そろそろ行かなあかんな。」
「ほんまや、もう十二時過ぎたで。」
「恐いなぁ、でも行かなあかんし……がんばろう。」
と、言いながらみんなは立ちあがりました。
ちらちら降っていた雪もやみ、一面にうっすらと雪が積もっていました。
「友吉、御幣持ったか。新兵のお前が先に行くんやぞ。」
「えっ、ぼくが先に行くんか。」
「きまっとるがえ。一番小さい一年生のおまえが新兵や。」
「一番初めに行くところは、八幡さんや。」
「なんだか恐いなぁ。」
「さあさあ元気を出しさっさと行け。後向かんと歩くんやぞ。」

きつねがえり　おろろやころろ
きつねがえり　おろろやころろ

声をそろえて言いながら、新兵の友吉を先頭にみんなは歩いて行きました。
八幡さんの松の木の所まで来ると、
「友吉、ここでええから、『そばかうん』と言うてな、御幣をさすんやで。」
「そばかうん、言うてか。」
「そうや。」
友吉は言われたとおり、そばかうんと言って、御幣と油あげをつけた竹を土にさしました。

「さあ、次は村はずれの俵田橋やぞ。」

きつねがえり　おろろやころろ
きつねがえり　おろろやころろ

と言いながら、きつねの出て来るような所々に御幣をさして行きました。

きつねがえり　おろろやころろ
きつねがえり　おろろやころろ

最後の場所になるとほっとして、みんなでとっとっと走って、お寺へ帰りました。

その夜、家に帰った友吉は、きつねがえりのことを思い出して、なかなか眠れませんでした。

「あの油あげは、どうなったんかなぁ……。」

いつの間にかすっかり眠りについた友吉は、夢でもみたのでしょうか。

小さな声で口ずさんでいました。

きつねがえり
おろろやころろ
きつねがえり
おろろやころろ

※昔から伝わっていた行事〝きつねがえり〟を経験された男の人や、寺院より聞いた話を元に、創作しました。

また、この行事は、子供たちの勇気や度胸をつける為に、肝試しの一つとしても行われていました。

木挽さん

やーれ　のこよさがれよ　すみままさがれ
おれとおまえの　かねもうけよ
やーれ　こびきさんたち　はなからはなへ
はなのさかりも　やまのなか

西谷の山奥から、こんな、木挽さんたちの歌声がのんびりと聞こえてきます。

みんなのおじいさんや、おばあさんの生まれておられないずうっと昔のお話です。

昔は、製材所というものがありませんでした。そこで、柱を削ったり、板を挽いたりするのが、木挽さんの仕事でした。木挽さんは、杉皮葺きの小屋で何日間か寝泊まりしながら、山にこもって仕事をするのです。

この西谷の山の中で仕事をしているのは、三原の里の弥三郎親子と、長右ェ門親子の四人でした。

「おっとう、そののこぎり大きいなぁ。」

「これは、おがいうもんやで。こうやって墨を引いた上を、真っすぐ切っていくのや。」

「ふうん、おらにも出来るやろか。」

「次郎や五郎ちゃんにはまだまだ無理やけど、わしらの仕事よう見とるんやで。」

「そうや、よう見とったらな、立派な木挽さんになれるんや。」

杉木立の間から、青い空と、輝くお日さまが見え、遠くに谷川のせせらぎが、微かに聞こえています。

その時、山の下の方から、誰かの呼ぶ声がします。

「長右ェ門さーん、弥三郎さーん。」

「長右ェ門さーん、弥三郎さーん。」

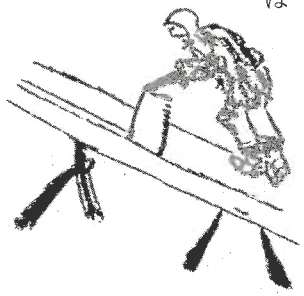
「はて？こんな山の中まで呼びに来るとは、わしらにいったい何の用事やろ。」

「なんぞ急なことでも出来たんやろうか。」
呼びに来たのは、同じ村の定吉さんでした。
「長右ェ門さん、あんたとこの隣のお貞ばあさんがようなかってな、急なことやが明日が葬式や。」
「えっ、それは気の毒なことやな。」
「ほんまに、やさしいええ人やったのに・・・・。」
「そういうことやさかいに、忙しいやろうけど、じきに帰ってきてくれてか。」
「わかったで。この子らによう言って、じきに山を降りるでな。」
「そんなら頼みましたで。」
そう言うと、定吉さんは急いで帰って行きました。
「次郎ちゃんも、五郎も今の話聞いたやろ。」
「おっとうらは村へ帰らなあかん。あさっての晩には戻ってくるさかいに、ここにおってくれるか。」
「うーん・・・・せやけどおらたち二人だけでここにおるのん、ちょっと怖いなあ。」
「ほんまや。なんどきやへんやろか。」
「なんにも怖いことなんかあらへん。氏神さんがちゃんと守ってくれてや。」
弥三郎さんと長右ェ門さんは、二人の子どもを残して、急いで山を降りて行きました。
「五郎ちゃん、この板片付けようか。」
「うん。次郎ちゃんそっち持ってよ。」
「よいしょ、重たいなぁ。」
「ほんまに重たいわ。」
「おっとうら、こんな薄うにうまいこと切れるもんやな。はようこんな板が切れるようになりたいな。」
「ほんまや。」
西の空にお日さまが沈み、林の中を吹き抜ける風もひんやりと肌寒くなってきました。薄暮の中で、うつぎの花が、ひとひらひとひら散っていくのが見えました。
次郎と五郎は、二人だけになった寂しさから、早く小屋に入ろうと思いました。
その時、下の方から、白い着物を着て、胸までも

ありそうな、真っ白なあごひげを生やしたおじいさんが、登って来られるのが見えました。
「五郎ちゃん、誰かきよってや。」
「ほんまや、見たことないおじいさんやな。」
「何しにきよってんやろ。」
すると、そのおじいさんは、二人の前まで来て、
「おまえたち二人だけか。戸締まりをしっかりして早く寝るんやで。」
と言って、山の上へと登って行かれました。
「おじいさーん。」
と呼んでみましたが、返事がありません。
もう一度呼んでみました。
「おじいさーん。」
けれども白い髭のおじいさんは、振りむきもしないで、すーと消えてしまわれました。
なんだか気味が悪くなった二人は、小屋の入り口に、いっぱい板を立て掛けました。そして、おっとうたちの布団も全部かぶって震えておりました。
どこかで、ほーほーほーとふくろうが鳴いています。
「五郎ちゃん、もう寝たん。」
「いいやまだや。なかなか寝られへんな。」
「あのおじいさんもう来てないやろか。」
二人は、布団の中で話し合っておりましたが、いつの間にか眠ってしまいました。
朝の光りが杉木立を照らし、小屋の中にも差し込む頃、次郎と五郎は目をさましました。
夕べのことを思い出して、そっと小屋の戸を開けた次郎は、
「五郎ちゃんちょっと来て、何やこれは。」
何と小屋の回りには、けもののような足跡がいっぱいついているではありませんか。
二人は恐ろしくなって、夢中で山を降りて行きました。林の中を駆け抜け、小さな川も飛び越えました。転んだり滑ったり、それでも二人は一生懸命走

りました。やっとふもとの村まで降りてきました。
〝あっ、向こうに誰かおってや〟
次郎と五郎は、うれしくなって思わず叫びました。
「おじちゃーん。」
二人は頬っぺたを真っ赤にして、まっしぐらに走って行きました。
「おまえたちどないしたんや、そない慌てて。何ぞあったんか。」
「この辺りに白い髭のおじいさんおってか。夕べおらたちの小屋へきたったんや。」
「さあ、そんな人は見たことも聞いたこともないなおまえたち夢でも見たんやろう。」
「いいや、夢と違うで。なあ五郎ちゃん。」
「そうや。それに小屋の回りにへんな足跡がいっぱいあったもんな。」
「どんな足跡やったんや。」
二人は、自分たちの見た事を話しました。
「うーん、それはな、きっとオオカミやろ。オオカミが小屋の側まで来たんと違うか。」
「えっ、オオカミ？」
「そうや、この西谷の山奥には、オオカミがじょうさんおるんやで。」
「ふうん、そうやったんか。」
「それにしても、おまえたち子ども二人で、あの山の中では心細いことやろ。今夜はおじさんの家に泊まったらええ。」
「えっ、ほんまに泊まらしてくれての？」
「そうや、おっとうらが戻って来たったら、又一緒に山に入ったらええ。」
「わぁ、おおきに。」
二人の子どもは、やさしいおじさんの家に泊めてもらいました。
あくる日、次郎と五郎のおっとうたちが帰ってこられ、二人は、おじさんの家で世話になったことをおっとうたちに話しました。
「この子らがえらい世話になったそうで、ほんまに

すまんこっちゃったなあ。」
「おじさん、おおきに。」
「おおきにおじさん。」
「あゝ、気いつけてな。」
四人は、何度もお礼を言って、山へ入って行きました。
次郎と五郎は、代わる代わる、白い髭のおじいさんのことや、オオカミのことを、おっとうたちに話しました。
「そうか、それは怖かったやろうな。」
「そうや、その白い髭のおじいさんのことはな、おっとうが子どもの頃に聞いた、こんな話があるんや。おっとうらのようにな、木挽さんたちが山で仕事をしておった時のことや、ちょうど正月前の寒い日でな、みんなで火を炊いてあたっていたそうや。そこへ白い髭のおじいさんが現れてな、『おまえさんたち、正月には家に帰られるのか。そんなら、それまで私に　かすがい　を貸してくだ
さらんか。』とな。」
「えっ、かすがい言うて何や。」
「かすがい言うのは、今で言うたら、かぎのようなもんじゃ。その人はやさしそうな顔をして、『正月の三日には、氏神様の三番目の格子戸にかけておくからな。』と言うと、すーと消えてしまわれたそうや。」
「へぇ、消えてしもたったんか。」
「そうや、消えてしもたったんや。」
「ふうん、それでかすがいは貸してあげたったんか。」
「そうやで、正月の三日に、氏神様にお参りするとな、かすがいは、格子戸の三番目に、ちゃんと掛けてあったと言うことや。それで、その白い髭のおじいさんは、氏神様のお使いやろうということに



なったんや。」
「ふうん、そうやったんか。」
「オオカミが、小屋の側まで来たけど、よう入らなんだのも、やっぱり氏神様のお陰やで。ありがたいこっちゃ。」
「そうやなおっとう。おいら家に帰ったら、氏神様に、ありがとう言うてお参りして来るわ。」
「うぅん、それはええことや。」
西谷の山あいに、木挽さんたちのおがの音が静かに響いています。

やーれ　のこよさがれよ　すみままさがれ
おれとおまえの　かねもうけよ
やーれ　こびきさんたち　やまからやまへ
はなのさかりも　やまのなか

三原の里の氏神様は、正一位大歳大明神と呼ばれ
その昔、木挽さんたちを見守られたように、今も、
里人達の生活を、静かに見ておられます。

※ 中国山系に連なる三原の里は、その昔、山仕事に従事していた人がたくさんおられました。
この話の内容については、自分の親が木挽であったといわれる人から聞きました。また、木挽さんの生活実態については、〝ふるさと三原の生活誌〟に掲載されている文章を参考にしました。

遠藤源三郎さんのお墓

むかし、むかしずうっとむかし、あちらこちらで戦いが続いていたころのお話です。
野間城というお城があって、有田宗張（むねはる）というお殿様がおられました。遠藤源三郎さんは、家来の中でも、それはそれは腕ぷしの強いお侍さんでした。
ある日のこと、源三郎さんが但馬の戦いに勝って大勢の家来と一緒に、急いで帰る途中のことです。
険しい産坂峠にさしかかった時、敵の追ってくる声が聞こえてきました。
「あっ、敵が追ってくるぞう。」
「おうい、早く逃げろ。」
その時、敵の放った矢が運悪く源三郎さんの歯に当り、馬から転び落ちました。
家来はびっくりして走り寄りました。
「大将、大将。」
「しっかりしてください。」
源三郎さんは、勇敢な侍大将でしたが、その傷は深く、家来達の懸命の介抱のかいもなく、苦しみながら、とうとう息をひきとりました。
「立派な大将だったのになあ、惜しいもんだ。」
「本当だ、戦いにはいつも勝って見事なもんだった。」
「強い大将を亡くしてしまったものだ。」
そういって家来達は悲しみながら、大将が静かに眠れるようにと、野口の山の中にこんもりとしたお墓を作り、線香やお花を立てて供養しました。
それからも家来達がお参りしておりましたが、何年か経つうちに、だんだんと人々から忘れられていきました。
野間城も焼け落ち、戦いもなくなり、それからまた何年も何年も経ちました。城山という名を残すだけで、静かな村となりました。

その村に彦左衛門さんと孫の幸助が暮らしていました。幸助はとても元気者で、子供達の遊び仲間のがき大将でした。友達の三吉ちゃん、弥助ちゃん、太郎ちゃん達と、いつも戦いごっこをして遊んでおりました。

「おれは源三郎だ、強い侍だぞ。三吉は家来になれ。太郎と弥助は敵になれ。」

「おら、いつもやられてばっかりで嫌いや。歯も痛いから遊ばへん。」

と弥助は言いました。

「幸助ばっかり大将になってずるいわ。」

「かわりばんこにしたらええのや。」

「おらも大将になりたいなあ。」

三人が言うのも聞かず幸助は、木の棒を振りまわしながら山の中へ入っていきました。

「幸助ちゃん、そっちへ行ったらうす暗うて恐いで。」

「何も恐いことない。みんなついて来い。」

三人はしぶしぶついて行きました。

「もうこの辺でええから、戦いごっこするぞ。」

「わしは強い源三郎だ、みんなかかって来い。」

幸助は持って来た木の棒を頭の上へ振りあげて言いました。

「よしっ、源三郎をやっつけろ。」

「えいっ。」

「やあっ。」

と、幸助が向かっていきました。

弥助は後に跳びのいた拍子に、石につまずいて転んでしまいました。

「あっ、痛いよ、痛いよう。」

「どないしたんや。」

「べっちょないか。」

「お尻打ったんか。」

幸助はやさしく弥助の

お尻を撫ぜてやりました。

ちょうど弥助ちゃんが転んだすぐそばに土がこんもり盛り上がって、大きな石が建ててありました。

「あっ、ここはお墓や。」

みんなびっくりして見上げました。

「ほんまや、お墓や、えらい所で遊んどったのう。罰が当ったらどないしょう。」

「どないしたらええやろ。」

「そうや、みんなであやまろう。」

「すんません、ここがお墓やと知らんと遊びました。もうここで遊ばへんから、弥助ちゃんのお尻を治して下さい。」

「弥助ちゃんの歯の痛いのも治して下さい。」

四人は手を合せて一生懸命拝みました。

夕方になるとうす暗い山の中は一層淋しく、心細くなってきました。

「もうみんな帰ろう。」

「そうやなあ、早う帰らんとおっどうもおっかあも心配してやなあ。」

来た時の元気はどこへやら、四人は黙って木々の間をくぐり抜け、帰って行きました。

夕焼に染まったすすきの野原を通って家の近くまで来ると、突然弥助ちゃんが言いました。

「おらの歯、治ったみたいや。」

「ええっ、ほんまか。」

「ほんまや、昨日からずっと痛かったのに、嘘みたいや。」

幸助は家に帰ると、山の中のお墓のそばで遊んだことや、弥助ちゃんの歯の治ったことを、おじいちゃんに話しました。

つぎの日の朝早く、幸助と彦左衛門さんは、村はずれにあるお墓にお参りしました。

「おじいちゃん、ここやで。」

「おおこれはやっぱり源三郎さんのお墓じゃ。」

「えっ、おらがいつも戦いごっこをするお侍さんのことか。」

「そうや、源三郎さんは強いお侍さんやったんやぞ。それに、源三郎さんの墓に参ったら歯が治ると聞いたこともあったが、やっぱりほんまやったんかのう。」

「ふうん、せやけど拝んだら何で歯が治ったんやろな。不思議やな。」

「何で歯が治ったのかわしにもようわからへんのやが、源三郎様は、歯に矢が当って苦しんで亡くなられたんや。それで歯が痛うて困っている人の事を気の毒に思い、歯痛で苦しまんように治してくれてんやろうかのう。」

「やさしいお侍さんやったんやな。」

「そうじゃろな。それにお参りしてくれる人に野間城のことを伝えたいんとちがうかのう。幸助もようお参りさせてもろたらええ。」

こんな話をしながらおじいさんと幸助は、源三郎様のお墓に手を合わせました。

今も、源三郎様のお墓にお参りすると歯痛が治るという話が言い伝えられております。

※ 野間城六代城主、有田宗張の家来で、四人の侍大将の中の一人であった遠藤源三郎さんは、戦の帰途、産坂という所で敵の放った矢が歯に当り、戦死されました。（八千代町史より）

そして今もなお、お墓を守っておられる子孫の遠藤氏から、源三郎さんのお墓に参ると「歯痛が治る」ということが言い伝えられていると聞いております。

天船の天狗

むかし　むかし、ずっとむかし、まだ野間谷村がドロドロの沼地で、沼谷と呼んでいた頃のおはなしです。

すご谷を囲む天船の里には、雪が解けはじめると、谷川の水がさらさらと流れ、小鳥がさえずり、あたたかい春が訪れます。村の人たちは、その谷川で洗たくをしていました。側で純太くんや、お恵ちゃん、お京ちゃんたちが、かごめかごめをして遊んでいました。

かごめ　かごめ　かごの中のとりは
いついつである　夜明けのばんに……

子どもたちの歌声が、山の奥までひびいていました。

のどかな山里の春です。

子どもたちの声で、昼寝をしていた天狗たちが目を覚ましました。

「ああーようねむったわい、龍王様からのお使いも来ないし、春の日長は退屈なものじゃ。」

「何か面白い遊びはないものかのう。」

「おうそうじゃ、面白いことがある。村の子どもたちが楽しそうに遊んでいるでないか、呼んで一緒に遊んだらどうじゃろう。」
「うーむ、それがよい、それはよい考えじゃ。」
天狗たちは、大きな団扇でふわふわと、
「子どもよ来い、子どもよ来い。」
と、あおぎました。
すると、ふしぎふしぎ、子どもたちの体がふわっと浮きました。
純太が、
「おや変だ、体がぷかぷか浮いて来たぞ。」
と、言いました。
「ほんまや、何だかふわふわ浮いて来たわ。」
「わあ、えらいこっちゃ、助けてー。」
子どもたちはくるくる舞いながら、天狗たちに山奥へと、つれて行かれてしまいました。
洗たくをしていた純太のお母さんが、子どもたちの声がしなくなったのに気がつきました。
「おや、子どもたちがおれへん、みんなえらいこっちゃ。」
「えっ、みんなどこへいったんやろ。」
「純太、純太、どこへ行った……。」
お母さんたちは、青くなって捜(さが)しました。
そのとき、山の奥から、
「わっはっはっは……子どもたちは、わしらがあずかったぞ。」
と、天狗の大きな声が聞こえて来ました。
これを聞いたお母さんたちは、
「キャー、大変だー天狗だ。」
「天狗が子どもをさらって行ったよう。」
「子どもたちを助けてー。」
口々に叫びましたが、どうすることも出来ませんでした。
あとには、わっはっはっは……と天狗たちの笑い声が聞こえているだけでした。

急いで村へ帰ったお母さんたちは、村で一番えらい庄屋さんの家へ駆け込んで行きました。話を聞いた庄屋さんは、村のみんなを集めて相談しました。
「のう皆の衆、今聞かれた通り大変困ったことになってしもうた。子どもたちを取り返すには、どないしたらよかろう。ひとつ皆の衆の考えを聞かせてもらいたいものじゃ。」
みんなわいわいがやがや言うばかりで、なかなか良い考えが浮かびません。
「山へ登って天狗をやっつけなしゃーないかのう。」
「天狗は、あの高い鼻に神通力というえらい力があると言うでのう。」
「うーん、あの鼻にのう。何とかして鼻を折る方法はないもんか。」
「そうだ、熱い芋がゆを持って行ったらええ。」
「芋がゆ？何でや。」
「食べようとして中へ鼻を突っ込んだら、あちちちとやけどして、神通力もきかんようになるんとちがうか。」
「そらあかんわ、そんなことをして天狗様をおこらすより、天狗様にお願いしょうで。みんなが悲しんどることを話して、よくよくお願いするんや。天狗さんもきっとわかってくれてやと思うわ。」
「そうやな。」
「そのとおりかも知れんな。」
「みんなでお願いに行こうか。」
そして、とうとう村人たちは天狗岩まで行くことになりました。庄屋さんを先頭に酒だるをかつぎ、大豆も皿にのせて持って行きました。
「おゝ、あれが天狗岩だ、呼んでみよう。」
「てんぐさまー、大てんぐさまー。」
すると、
「なんじゃ。」
と、大きな声がしました。
「で、で、でたあー。」

「て、て、てんぐだー。」
しかし逃げるわけにはいきません。おそるおそるその場に座って深く頭をさげました。
「何か用か。」
「子どもたちと楽しく遊んでいるところじゃのに、何しに来たのだ。」
「昼寝をしておれば起こすし、遊んでおればじゃましに来るし、何と人間はうるさい者じゃのう。」
「へい、おたのしみのところ申し訳ありません。実は……天狗さまがさらわれた子どもたちを返してもらいとうて参りました。どうか子どもをお返し下され。家のもんは毎日泣いとりますのじゃ。」
「何だと、子どもを返せとな、さてさて子どもがさらわれた位で人間どもは悲しいのか、どうもわからん、まあいい、返してくれと言うなら返してやろう。」
そういって天狗が、
「おーい、子どもたち出てこい。」
と呼ぶと、みんながとんで来ました。
「あっ、おっとう!!。」
「おっかあ!!。」
「おお、ぶじだったか。」
みんな抱き合って泣きました。これをみていた天狗たちは、
「どうもわからん、人間どもは泣いているがなぜ泣くのか、わしにはわからん。」
と、首をかしげていました。
「これは天狗様に飲んでもらおうと、天船の百姓どもが心を込めて作ったお神酒(みき)でございますだ。」
庄屋さんが持って来たお酒と大豆を渡しました。
「この天船の土地で始めて取れた大豆でございます。どうぞ、お召し上がり下され。」
「何だと、酒とさかなを持って来たと申すか、お前たちはよく気がきくのう。それではさっそくよばれることにしょう。」
「さあ、どうぞどうぞ。」

天狗は、お酒を一気にごくごく飲みました。お酒が身にしみました。
「おや変だぞ。このお神酒を飲むと、体があたたかくなって来た。これが人間どものあたたかい気持ちというものかな、体中にじわっじわっとしみわたってきたようじゃ、うーむ。」
と言って、目を押さえました。
「わしの目からも涙が出かけた。こんなことは天狗の世界にはないことなんだが……こいつは妙だ……何だかわかって来たようだ……人間どもの心が……人間の気持が……。」
天狗たちは、体をふるわせて泣き出しました。
「天狗様、これからおれたちをさらったりせんといてな。」
「おゝもうお前らをさらったりしないぞ。人間を捕えるために、この大団扇を使うようなことはしないぞ。」
天狗は、村の人とかたい約束をしました。
「それでは帰らせてもらいますだ。」
「天狗様ありがとうございました。」
「さようなら。」
「さようなら。」
天狗は村人の帰るのを、いつまでも見送っていました。
それから、天狗たちは村へ帰った子どもたちが、歌ったり、縄とびをして楽しく遊んでいるのを、岩の上からじっと見ていましたが、やがてごろりと昼寝をはじめました。

それからまた、何日か経ったある日のことです。
役人たちが村へやって来ました。昔は年貢(ねんぐ)と言って、村で作った米や麦などの作物をお役人に差し出さなければならなかったのですが、この村は沼谷と言われているように、ほとんどがじめじめした土地で、雨の多い年は一生懸命働いても作物がとれず、差し出すことが出来ないのです。それなのに納めな

いとひっくくって牢屋へ入れてしまうのでした。
「お役人様、お助け下さい。お願いです。つれて行かないで下さい。」
「うるさい、とのさまの命令じゃ。お前たちの泣きごとなぞ、いちいち聞いていられるか。」
「お役人さま、おっ母を返してくれ　おっかあー。」
「うるさいこのがきめー、じゃまだてするとお前も牢屋にぶちこむぞ。」
「おっ母を返して……お役人さま……。」

このようすを岩の上から天狗たちが見ていました。
「おや、あれは何だ。」
「百姓たちが、いじめられている。ひっくくってひきずっていくぞ。」
「あっ、子どもが棒でなぐられている。うーむ、かわいそうに……。」
「悪い役人どもだ。」
「ようし、もう許さない。この大団扇で役人どもをこらしめてやろう。」
「いや、だめだ。人間どもを捕えないと約束したんだ。困ったなー。」
「百姓が泣いている。」
「子どもも泣いている。」
「わしは、わしはもうがまんできん。かんべんならん。」
「ようし、わしもやるぞ。子どもたちよ、約束を破るが許してくれよ。」
「そーれ、太鼓を叩け!!岩を打て!!わしはやるぞ。」
天狗たちが大団扇をさっと振りました。すると、ふしぎふしぎ、役人たちの体が、さっと浮き上がりました。
「わぁ、これは大変だ。」
「助けてくれぇ。」
「助けてくれぇ。」
大声で叫び、足をばたばたさせましたが、役人の体は、そのままふらふらと天狗岩の方へ吸い込まれ

ていきました。これを見て村人たちは、
「あっ、天狗さまだ。」
「天狗さまだぞ。」
「天狗さまが助けてくれたったんじゃ。」
「おぉい、天狗さま、ありがとう、ありがとう。」
と、大声で叫びました。天狗は、
「天船の里の百姓たちよ。わしたちは、とうとう約束を破ってしもうた。それでもうこの地上に住めなくなってしまった。天に昇って龍王様のおそばで修行のやり直しじゃ。」
「天狗さま、そんなこと言わずにこの天船におって下され。」
「いや、それはできぬ。だが龍王様のお使いでこの里に降りて来るかもしれないぞ。」
「どうしてもいかれるのかな。でも、たまには降りてきて下されな。秋には龍王様に差し上げるお神酒を用意して待っておりますでな。」
「そうか、秋が来るのを楽しみにしているからのう。」
「天船の里の人間たちよ、みんな仲良うに、助け合って元気で暮らせよ。」
「もう行くが、困ったことがあれば龍王様を呼んでくれ。いつでもわしたちが助けに来るからのう。」
「天狗さまー。」
「天狗さまもお元気でー。」
「龍王様によろしく。」
「さようなら。」
「さようならー。」

※「貴船神社、秋祭りの由来」を参考資料として、清水谷善明先生が劇の脚本に創作されたものです。その脚本を元にお話にしました。

一夜凍（いっちゃ）

カン　カン　カン　カン
カン　カン　カン　カン

野間の里では、昔、寒い寒い凍りつくような冬の朝は、いつもこの音が聞こえていました。

健太の家でも、冬になると、遠いところから、職人さんが来られ、凍豆腐作りの仕事が始まりました。そして、毎朝、一夜凍をたたき落とすカンカンという音で目をさましました。

この音を聞くと、

「ああ良かった。一夜凍が取れたんや。豆腐がうまいこと凍ったんやなあ。」

と思うのでした。

健太には、かわいい友達がいました。東の山に住んでいるきつねのこん吉です。

今日も健太は、お母さんにつくってもらっただんごを持って、こん吉のいる東の山へ出かけていきました。

「こん吉ー、あそぼうー。」

「コーン、コン。」

「こん吉、今日は、おっかあにつくってもろたおいしいだんごを持ってきたんやで。一緒に食べよう。」

「おおきに。コーンコン。健太ちゃんはええなあ。やさしいおっかあがおって。おらのおっかあはなあ・・。」

「ごめん、ごめん、こん吉のおっかあは、食べ物を探しに行たったままなんやなあ。こん吉、さびしいやろ。」

「うん。」

「さあ、一緒にだんごを食べよう。」

「おおきに、ぱくぱくぱく、ああおいしい。」

「こん吉、ようけ食べてええぞ。」

「うん、せやけど、健太ちゃんの分なくなるで。」

「おら、家に帰ったらいっぱいあるから、こん吉にみんなやるわ。」

「おおきに。ぱくぱくぱく　ほんまにおいしいなあ。」

こん吉は、だんごを全部食べてしまいました。

「こん吉、今度は、もっとぎょうさん持ってきたげるわ。」

と言って、健太は、家へ帰っていきました。

健太が帰ってしまって、一人になったこん吉は、なんだかとても寂しくなりました。

「おらのおっかあ、いつ帰ってきてんやろ。はよう帰ってきてほしいなあ。」

「さっき、健太ちゃんにもろただんごおいしかったなあ。」

こん吉は、優しいお母さんのことを思い出し、急に走り出しました。日の暮れた暗い山道をおりて行きました。そして、気がつくと、いつの間にか、健太の家の近くまで来ていました。

その晩は、キラキラと星が光り、寒い寒い夜でした。こん吉が見ていると、健太の家の戸が、ガラガラッと開き、お母さんの声が聞こえてきました。

「健太、今から、豆腐出し手伝うてくるから、早う寝るんやで。」

「うん。おっかあも寒いから、かぜひかんようにしいよ。」

「大丈夫や。」

そう言ってお母さんは、豆腐小屋の方へ歩いていきました。こん吉は、健太のお母さんの後をついていきました。そして、小屋の戸のすき間からそうっとのぞいて見ました。

健太のお母さんは、職人さん達と一緒に、薄く切った柔らかい豆腐を、長い板の上に並べておられました。

パンパンパン　パンパンパン

白い豆腐が、板の上に、次々と並んでいきました。

パンパンパン　パンパンパン

板の上がいっぱいになると、豆腐が倒れないように小屋の外へ運び出されました。こん吉は、

「健太ちゃんのおっかあ上手やな。柔らかい豆腐をうまいことたてて並べてやなあ。」

と、思いました。

「パンパンパン　パンパンパンか。」

こん吉は、手真似をしてみました。

「パンパンパン　パンパンパン。おもしろいなあ。せやけど、こんな夜になってから豆腐を外に出してどないしてんやろ。凍ってしまうのになぁ。」

しばらく見ていましたが、

「さっきは、おいしいだんごおおきに。」

と、こん吉は小さい声で、健太のお母さんにお礼を言うと、パンパンパン　パンパンパンと、手真似をしながら山へ帰っていきました。

次の日、こん吉は、山へ遊びに来た健太に言いました。

「健太ちゃんのおっかあ、お豆腐並べてのうまいな。あのお豆腐どないなるんや。」

「こん吉、見に来たんか。あれは、一晩外に出して凍らすんや。朝になってうまいこと凍ったら、一夜凍いうのができるんや。それが、高野豆腐になるんやで。」

「ふうん、一夜凍か。おもしろいこと言うんやな。」

「こん吉、豆腐小屋へ何しに行ったんや。」

「あのな、おだんごのお礼が言いたかったんや。」

「こん吉、ほんまは、おっかあに甘えとうなったんやろ。」

「う、うん・・。そうやけど、おらが行ったらびっくりしてやろ。」

「そうや！　おらに化けたらええ。」

「健太ちゃんにやったら上手に化けられるで。見とってよ。コーンコン、ココーンコン、健太ちゃん

になあれ！　パッ。」

「うわあ、うまいうまい、そっくりや。健太がふたりになったみたい。こん吉、それやったら、おっかあにもわからへんぞ。」

「そうかな、へへへへ……。」

「でも、しっぽが見えへんようにな。」

こん吉は、いい事を聞いてうれしくなりました。

凍りつくような寒い夜が何日も続きました。

そんなある晩のことです。こん吉は、お母さんに会いたくなって、今日も豆腐小屋へ見にきていました。

パンパンパンと板の上に豆腐を並べて、小屋の外へ次々と運び出されました。やっと出し終わった頃、急に空の様子が変り、今にも雨が降り出しそうになりました。家に帰ろうと、小屋の外へ出たお母さんは、大声で言いました。

「職人さん、えらいこっちゃ。雨がふりそうや。外に出した豆腐を、小屋の中へ入れなあかん。」

「そらえらいこっちゃ、豆腐が雨にぬれたら、ええ一夜凍がとれへん。おいしい高野豆腐がでけへんようになってしまう。」

お母さんや職人さん達は、今さっき、外に出したばかりの豆腐を、おおあわてで、小屋の中へ入れていきました。

その様子を見ていたこん吉は、

「あっ、外にまだいっぱい豆腐が残っとるのに、雨がポツポツ降ってきた。どないしたらええやろ。」

「そうや、おらも手伝おう。健太ちゃんに化けて、おっかあの手伝いをしよう。」

コーンコン、ココーンコン、

健太ちゃんになあれ！

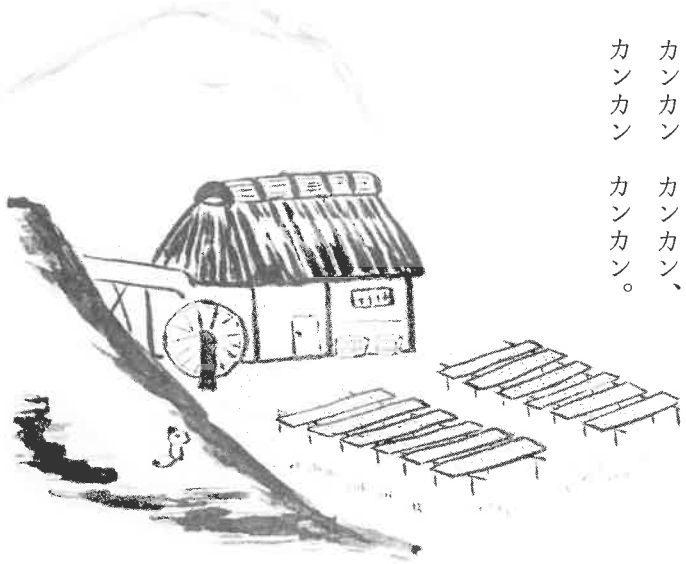
うまく健太に化けられたかどうか心配で、胸がどきどきしましたが、勇気を出して、健太のお母さん

母さんの所へいきました。
「おらも手伝うわ。」
と、こん吉が言いました。
「健太、来てくれたんか。すまんな頼むで。重たいから気をつけよ。」
「大丈夫や。」
そう言って、健太に化けたこん吉は、お母さん達と同じように、豆腐ののった板をヒョイとかつぐと、小屋の中へ運んでいきました。外は寒く、雨がポツポツと顔にあたるけど、気持ちはポカポカいい気分です。
「おっかあの手伝いや、ヒョイ　ヒョイ　ヒョイ。」
「ええ気持ちや、ヒョイ　ヒョイ　ヒョイ。」
「雨なんかに負けへん。ヒョイ　ヒョイ　ヒョイ。」
健太に化けたこん吉は、一生懸命手伝いました。
最後の一つを運び終わったとき、お母さんが、
「健太、おおきに。よう手伝うてくれたなあ。手が冷たかったやろ。おおきに助かったわ。」
と、お母さんは、ぎゅうっと抱きしめてくださいました。
「健太、ここはもう大丈夫やから、はよ家に帰ってゆっくりおやすみ。ごくろうはんやったなぁ。」
「うん、ほな帰るわ。」
こん吉は、お母さんの胸の暖かさを思い出しながら、山へ帰っていきました。そして、ぐっすりと眠りこんでしまいました。

次の日の朝方まで、ぐっすりねむったこん吉は、あの豆腐がどうなったか心配になり、霜で真っ白になった山道をおりていきました。すると、もう一度外に並べられたあの豆腐が、見事に凍り、朝の光にきらきらと光っていました。まぶしいほどにキラキラと輝いていました。
それを見たこん吉は、
「良かった。ええ一夜凍ができたやろな。」
と思いました。

やがて、一夜凍を落とす音が一面にひびきわたりました。

カンカン　カンカン、
カンカン　カンカン。



※門田村の森脇治郎兵衛の分家定治郎の三代定治郎が、農閑企業として高野豆腐の製造を思いたち、高野山へ赴き製造法を研究して帰郷する。江戸時代には五件にすぎなかったが明治に全盛期をむかえる。
寒く凍る夜が続けば朝毎に、カンカンと一夜凍のとれる快い音が響くが、天候の急変暖冬となると毎夜のように豆腐を出したり入れたりで寝る時間もない生活となる。

『八千代町産業発達史』より

ぽっぽこねんじゃ

柳山寺村の中ほどに、こんもりとした愛宕山（あたごさん）と呼ばれている山がありました。この愛宕山の頂上には、『火産（ひぶせ）大神』という火の神様がおまつりされていました。

地蔵盆がこの神様のお祭りの日で、村の人達は、「ぽっぽこねんじゃ　ぽっぽこねんじゃの日」と言っています。その日は大勢の子ども達が手に手に松明を持って山を下りてきます。この勇ましくて、美しい習わしを楽しみにし、そして自慢にも思っていました。

そのぽっぽこねんじゃの日の夕方になると、村の男の子達は神主さんを先頭に、愛宕山の頂上へ登って行きました。

小さなほこらの前に、お米や、お酒をお供えして、神主さんの難しいお祈りが始まりました。

男の子達も一緒に拝みました。

「火事がおこらないように。お米や野菜がいっぱいとれますようにお守り下さい。」

空に一番星がチカチカと光りだした頃、松明に火がつけられて、小さな火が一つ、二つと増えていきました。暗くなった山に点てんと火がともり、木々の枝や葉の間から、見えたりかくれたりしながら、愛宕山の曲りくねった道を、下へ下へと降りてくるのが見えてきました。

ぽっぽこねんじゃ　豊年じゃ
ぽっぽこねんじゃ　豊年じゃ

と、小さな声が時々聞こえてきました。

松明の火は段々と下へ延び、愛宕山の曲った道を、頂上からくっきりと浮かび上がらせました。真っ暗な中に、点々と火の道ができて、ふもとの村から見ると、すばらしい眺めでした。

「お花ちゃん、愛宕山を見てん。ちらちらとお星さんの行列みたいできれいやわぁ。」

「ほんまに、空のお星さんが山へ降りてきたったみたいやな。」

赤い花のついたゆかたを着せてもらったお花ちゃんとおみっちゃんは、愛宕山の火がよく見える庄ちゃんの家へ行きました。庄ちゃんの家の縁側では、庄ちゃんのおじいさんと隣の太郎やんが、ぽっぽこねんじゃの火を見ながらお酒を飲んでいました。

「なあ太郎やん、ぽっぽこねんじゃの火は、いつ見てもええもんじゃのう。」

「ほんまにのう、いつ見てもええもんじゃ。わしらも子どもの時には、松明を持って走りまわったもんやが、もうそんな元気もないのう。」

「それに、小さかった頃はよう火事があったもんじゃ。作やんの家が燃えた時は、大火事やったのう。」

「そうやった、そうやった。あの時の火事はえらいこっちゃった。村のみんなが一生懸命に水をかけたけど、作やんの家は全部燃えてしもうて、隣の松つぁんとこにも火が移って燃えてしもうたのう。」

「この頃は火事も少のうなってきて、ありがたいことじぁなあ、太郎やん。これもあの愛宕山のおかげじゃなあ。」

その間にも、長い列になった松明の火は、あかあかとまわりを照らしながら、段々と下へ近づいてきました。

男の子達の声も大きくはっきりと聞こえてきました。

ぽっぽこねんじゃ
豊年じゃ
ぽっぽこねんじゃ
豊年じゃ

山から降りてきた男の子達は、パチッ　パチッと肩にかかる火の粉を払いながら、お宮さんの境内へと行きました。見に来ていた村の人達は、ありがたい御神火をろうそくにつけてもらい、その火を家に持って帰って、神様や仏様にお供えしました。

お宮さんの境内からは、にぎやかにドン　ドンドドドンと太鼓の音が聞こえてきました。お年寄りも、子ども達も村中の人がお宮様に集まってきました。

境内の真ん中に納められた松明の火があかあかと燃えて、まわりを明るく照らしています。そのまわりを二重、三重になって盆踊りが始まりました。

一七　八なる娘さん
から傘手に持ち　下駄を下げ
小やぶにもたれて　しくしくと
何が悲しゅて　なきなさる
　　チョコ　チョイ
何にも悲しくないけれど
この前　お江戸の大火事で
その時　お七っつあんどうしたか
だんなの　お寺にあずけられ
　　チョコ　チョイ

やーさとまかせの
　よいやまかせ
　せーせこーらせ

豊作を願って、いつまでも踊りが続きました。そして、愛宕山の火まつり『ぽっぽこねんじゃ』は、火事がおきないようにと今も続けられております。

※　柳山寺愛宕山神社の伝統行事である「火の祈願祭」が、毎年八月二十四日に行われている。
ご神火を分けてもらい、仏壇や、神様に供えると、家内安全、無病息災、豊作などがかなえられるといわれています。

あとがき

最近の社会情勢による多様化にともない、一つには、幼児の「心」の問題が問われている時代です。

私たち、八千代町の保母全員が集まり、幼ない子どもたちに、なまの声でおはなしを語り、子どもの心に響かせたいと、昭和46年から本田宗夫先生の指導を受けて、童話の研究に取り組んでまいりました。

その間、色々な研究課題に取り組みましたが、殊に3年前から、八千代町に言い伝えられてきました伝説や昔話を、なんとかして幼心に印象づけたいと願ってまいりました。

それは、八千代町に生れ育っている子どもたちに、民話に流れるほのぼのとした温かなぬくもりを伝え、ふるさとの良いところを子どもながらに感じとってほしいとの思いからなのです。

昔の八千代の人たちが、どんな夢や願いをもって文化を築いていったか、北播磨の風土に根ざしたものを大切に思う優しい心を育みたいと願ってきました。

古文書等をひもときながら、由緒ある山野を歩いて、子どもと一緒に野の声や風の韻きに耳を傾けて感動したり、自然の中で色々と感じる心を大事にしていきたいと願ってきました。

保母からじかに聞くお話は、優しい声のスキンシップであり、お話の中の「お地蔵さん」や「きつね」に寄せる子どもたちは、空想や夢をいっぱい広げて、必ず暖かい心、豊かな人間性を育んでくれると思います。

語り継がれる流れを失いかけている民話を組み立てることは容易なことではありませんでしたが、ようやく24篇のものを組み立てることができましたので、八千代町35周年を記念して、日頃のささやかな研究の成果を発行するはこびとなりました。

八千代町の四季、美しい自然、まだまだ地域に残る行事や文化を、口演童話や民話作りを通して、伝承していきたいと願っております。

そして子どもたちに、揺さぶるような感動を残してやれるような保育者になりたいと願っております。

あとになりましたが、このお話作りを通じて、北播磨管内のすばらしい先生方との出逢いがあり、色々のご教示を頂けましたことは得がたいことでございました。

そして当地域の皆様方のご理解やご協力にも、厚く感謝申し上げます。

特に、この道を深く研究され、非常にご熱心にご指導くださった本田宗夫先生、今も尚私達を暖かく見守って下さっている渡辺善子先生に、厚くお礼を申し上げます。

高見栄子

◉編集委員

本田宗夫　益田晶代
高見栄子　藤本百合子
宮崎佐和子　青山真澄
横山久美　高見孝子
森位美代子　近藤貴美子
橋尾恵美子　小林美智子
吉田小夜子　植山友恵
高見礼子　谷位れい子
宮崎和代　渡辺達子

題字　岩田忠二
表紙絵　渡辺善子

心のふるさと 八千代町のむかし話

平成3年3月25日発行

編集　八千代町立保育園
発行　童話研究会

印刷　藤井印刷
社町上中30／TEL 42－0445